WASON
HQ
1104
J74+

明治廿六秊四月十五日發兌

女學雜誌

第三百四十二號

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號目錄

時事

國粹論の末路。女のたしなみ。禮に精と式とあり。國粹保存論の功過

閑書

藝妓の實況。刄なくして人を殺すはメカケなり（炭谷小梅女史）

小說

春風裡（トヲストイ作）不知庵主人譯

兒籃

林のぬし（下）若松しづ子

問答

書狀を手紙と云ふ譯○一筆と書く譯○下婢學校の在地○赤兒のシヤクリ止める方○府下にて外國人寄留の數○諸の動物懷胎の日數比較

女報

附錄

修正小倉百首

先づ下の文を讀め

女學雜誌は、隔週土曜日の發行と定む。扨て前の土曜日（八日）第三百四十一號を發兌したれば、此號は、來る土曜日（廿二日）に出版すべき筈なり。左れど、元の白表女學雜誌即はち、今の「評論」と、かわる〴〵して每週一回、刊行する方、都合よしとて、則はち、本日、此號を出す。次の土曜日に「評論」の第二號出版せらるに對せんとてなり。此號、前號と相去る僅かに一週日にて出でたり。日短きが故に、材料乏しきにあらねど、本號には、炭谷小梅氏が閑書を揭げたり。此文一時に全載せんとを欲したれば、本號には餘白乏しくなり、格外に欄の剕ち少なく、材の種類僅かとなりぬ。現に、朝顏を種ふる說、日本食物分析明細表、米國下婢の實況、日本女學史の評、くさ〴〵の摘要、文しらべなど既に脫稿して存すれども、今回揭ぐるを得ず、皆な次の號に遺す。此號を以て、完備の標本となすと勿れ。此號は眞とに臨時の版に均し。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第拾八巻　第三百四十二號
（明治二十六年四月十五日發兌）

時事

○國粹論の末路

近頃は、國粹論も稍やく下火とはなれり。惟んみるに、此論多くの誤謬を打混ぜしとは云へども、其の世に起れるは、確かに正當なる必要のありてなり。而して、其論ぜし主旨も、快よく、世弊の急所を刺したり。但だ、反動の勢に乘じて矯激の調子高く、如何にも度を過して保守論を爲せしかば、扨ては少なからぬ誤謬には陷いりしなり。然るに、如今、其末路に際して、百失並び露はれ、天下たゞ其愚を笑つて、其功をすら沒せんとはなす。吾黨は、此の老卒が勳を打消すに忍びず、左に、其好精神を表明し、兼て、其の誤謬をも摘指し、玆に其正當なる使命を掲げて、其感化を久しきに傳へんと欲す。但し、國粹論の全躰に付きて評するとは、此紙面の許さざる所なり。吾黨は、たゞ其の女學に關係せる一點の上よりのみ、觀察を下さんとす。

○女のたしなみ

打死と心定めたる武士が、香を髻の中に燒きこめたるなど、大丈夫のたしなみ床しくありけれ。況んや、我侯の爲めに毒婦を刺し、從容として仕置の刄に、露と消なんとき、徵かに面を紅くして、暫しの猶豫を請ひ、しとやかに厠に上りて、死後の汚れを淸めたるなど、女性の「つゝしみ」として、優美一層なる心地ぞする。惣じて、人には床しき振舞のありたきものなれど、取分け、天地の美を「人」となしたる、女性に於ては、特に豊かに此德を備へ有せずばある可らず。ビーナスにして、双肥ぬぎ、毘沙門にして、掌を擧げたらんには、假令ひ、裸躰畫を好しとする論者なりと雖ども、尙ほ顏を反けて見惡しとや云はん。故に、我が白河の翁は言へり、雪の降りたるにこそずたるるも口惜しけれ、彼高峯の雪はと云ひたれば、何となふ打笑みてまた立もやらず、さすがに捨も置で童なんどにあれ掲げ玉へよなど、ほのかに云ひしこそ善けれ、と。夫れ、掲簾の才ありと雖ども、直ちに露はさず、女はいとも斯るべきを以て、其「愼しみ」とはすべしと、敎ゆるなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

知れるをすら打つけては言可からず、況してや、知らざるをも猶ほ誇張せんとする痴者たるに於てをや。玆に至りて、女性の徳なるもの、殆んど盡たりと言ひつべし。

月の半ば村雲に隱れたる、花の未だ悉く蕾を破らざる、遠山影の霞に裾を垂れ、白き流れの木の間木の間に且つ消え且つ見はるるなど、凡そ其趣は、半陰半陽の所ろに掛りて存す。女性たらんもの、其膽は何如にも雄々しかるべしと雖ども、其心は何如にも優しかるべし。たとひ冷やかなるロヂックに合せては、何の不都合もなき事なりとも、美の趣は論理の外にあれば、最と濃やかなる所に「たしなみ」を遺して、曰く言ひがたきの邊に、美の味を添ゆべし。英語に之をデリケシーと云ふ。蓋し「雅にして濃やかなる心得」と云ふの義なり。此心得は女性たるものの、粹なり、生命なり。之なくんば、女の性は、消えたるなり、死したる也。名けて、婦女と云ふと雖ども、そは單に「人と」云ふに異ならず。喩へば、英資を欠きたる男子の如し。生れて、陰陽の別を賦せらるゝ所以、抑そも何處にか存する。

○禮に精と式とあり

「デリケシー」、又、「たしなみ」即はち、「雅にして濃やかなる心得」なる哉。女性に欠く可らざるは、此心得也、此の生命なり。

而して、此心得、發現して、樣々の形となる。其形の重んずべきは、其の生命の重んずべきが故なり。左れば、此形は、國と時代とによりて變遷すと云ふと雖ども、此生命、即はち此心得は、万古消長すべきにあらず。此形の亡ぶるは、尚可なり、此心得の失するは即はち生命なきが如し、一日も、看過すべからざる也。

國によりて、此形の異なるを見んと欲せば、試みに、武家の女のたしなみと、西洋婦人のデリケシーとを比較せよ。其違ひ何如に太甚しきや。

世人、往々、西洋婦人を目して、禮儀なく「たしなみ」なきものとなす。是れ、大ひなる誤まりとす。其禮儀の數々あると、三百に足らずとせず、其「たしなみ」の深きと、殆んど驚ろくに堪へたり。故に、「禮の精」を以て、相較ぶれば、東西素より、大差なし。たゞ「禮の式」を擧て、之を對するが故に、日本人は、彼を以て粗野なりと嘲けり、西洋人は、我を以て、

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

不文なりとす。共に是れ識見なきの痴評なりとす。

例せば、本邦の女性は、大食せざるを「愼しみ」の一條とす、況んや、食に言舌を弄する如きをば、太しく嫌ふ所なれども、西洋の貴婦人は、店頭に菓物を試ろみ食ひ、車の上にて菓子を摘み食らふ如きことを恥とせず。又、本邦の女性は、お腹に、胎兒ありと云ふことを、一つの祝辭となし、寸白、腰の病を公けに口にして、相痛わり、甚しきは、恬然子宮病云々と言ひて、毫も憚かる所なきにも拘はらず、西洋の婦人は、一切、腰より下の肢躰を名言せず、もし懷姙などの言葉を口にすれば、野蠻人同様と見做し、婦人病云々など公言するものあれば、殆んど大罪人の如くに見做すべし。若し此類東西の矛盾を列擧せば、日も亦足らざることを覺ゆ。而して、如此き矛盾の多く且つ大ひなる所以のものは、偏へに彼と我との國風を異にするによる。

左れば、日本の女の「たしなみ」を有せずとて、直ちに西洋婦人を心得なしと嘲けるは、識者の公論にあらず。彼は亦た彼のデリケシーを所有すること、極めて多き也。而して、彼もし其デリケシーを女性唯一の心得となし、一々之を日本の女子に習はしめて、以て此邦固有の女の「たしなみ」を、輕んぜんとせば、是れ亦た異の禮を知れるものにあらず。

國によりて、「式」の異なること、此如し。時代によりて、其の異なり行くこと、亦之に似たり。時に隨ひて變通するを、禮の則とす。徒らに、古式を墨守して、西洋間に、疊縁を踏まぬ足付を誇り、列脚の倚子に三拜九拜の折目正しきを見さんとするは、愚かなるべし。

○當今の女生たしなみ乏し

文字に拘つらひて、精神に入らざるは、ボウロが歎きとす。万づの道を敎ゆる人の苦心、皆此處ろに存す。左れば、女の「たしなみ」を敎えんとする先覺は、女生に、其形を示し、謹んで之を學び之に練ることを工夫せしむるの與、徹然として、其精神に入らしむることを最上の旨とすべき也。然りと雖ども、此形亦た決して輕んず可らず、先づ形を重んぜざるものは、即はち亦た其神を忽諸にするもの也。

彼の、宣敎師派女學校の外國女敎師が、其女生に對するや、一方には、猥りに、日本固有の女禮の式を輕んじて、所云る「たしなみ」の形を打破し、他の方には、自個が固有する、デリケシー

の精神を之に吹入るゝと能はず。茲に於てか、其女生は、日本從來の武家婦人が所有せし、嚴然且つ優然たる「たしなみ」を悉とく失なひて、而して、西洋婦人が濃かなる心得の精神を未悟了せず。其間に彷徨して宿るべき家なく、全然無規則にして放埒なる無禮人とはなると多し。

此は、國によりて、式を異にする所以に掛念せざりしの誤に發す。之と均しく、時代によりて、式を異にするとに注意し、早く其方を案ぜざりしが爲の失策は、今の多數の女學校に於て、亦所謂る新日本的の女子敎育に於て、大抵到る所ろに現はれたり。今の女學生に「女のたしなみ」なしと非難する聲四方に反響す。之れ、一々古風の女禮を守ると成りがたきの末、新しき式未だ定まらず、新らしき形未だ熟せざるに當りて、早く既に古式を輕んずるの風を生ぜしによりてなり。

以上、二種の失策を觀るに、其由來する所ろ、餘り輕率に古來の習慣を棄てたると、餘りあはてゝ新風俗に移らんとしたるとより起れり。一言するに、國粹を輕んじ、西洋風、新風習に、餘り早く醉ひたるが爲めに、此失策あり。其輕ろき所ろ卑しむべし、其淡き所ろ非るべし、其自國及び祖先を重んぜざる所ろ見下ぐ可し。此に於てか、義烈の人、俠骨ある人、一種の愛國者、慨然として、國粹保存論を唱へ出すに至りぬ。」而して、其の女學に關する非難の言を聞けば、今の女學生は、女らしからず、女の「たしなみ」を失へり、淑雅優美の心得を失なへりと云ふにあり。」此の非難は、實に時弊の急所を刺したるものにあらずや。

○國粹保存論の功過

國粹保存論が、女學に關して言ふ所ろのもの、過半其當を得たり。左れど、今の女學生に此の「たしなみ」少なきを見て、直ちに、西洋婦人には、毫も女らしきデリケシーなき者の如くに暴評し、亦た今の女學校にては、到底此の心得を養成しがたきものゝ如くに斷念し、亦た所云る女の「たしなみ」を所有せしむるには、一々古風の形を墨守せしめざる可らずと速斷するが如きは、皆な其の誤謬なり。

此故に、國粹保存論に謝すべきは、其能く、女學の時弊を指示したるとにあり。之に戒しむ可きは、其論難の當を誤まり、濫りに不當の救濟論を立たるの一事にあり。左れば、國粹保存論によりて、時の弊の存する所を認むれば可なり。而して之を救ふの方策を立るに於ては、新に考案を要すべき也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

閑書

藝者と手掛とに勸めす

備前岡山　炭谷小梅

左の一篇は、岡山孤兒院の創立者にして、石井十次氏の助け手たる、炭谷小梅ぬしの筆記せられしものなり。言く々、通俗にして、一々實際を穿ち、着々急所を刺して、毫も遺憾なからしむ。宜なる哉、此人の傳道によりて、斷然、妾を止めたる人の少なからぬとや。凡そ、此の雜誌を讀まんほどの人にて、此閑書を寄せらる可き輩は、固く信ず、決して一人もあらじ。左れど、藝妾にすゝめて其業を止めしめんと心掛る人は、極めて澤なるべし。然るに、かゝる人は思ひ高潔に過て、反つて藝妾の情を知らず、其訓戒兎角に要緊を得ざるとあるもの也。左れば、かゝる人にして、若し此の一文章を讀まば、大ひに發明する所あらん。もし亦た此を讀みて聞かするとに利用せば、更に可らんとて、揭ぐ。女學子白す。

世に婦女子の段等樣々あり。第一は賢妻、又賢母にして、夫を助け其子供を教育し、一家を修め、一國の益を爲す。然るに、今こゝにかゝぐるは、右の如き良婦人に害をあたゑ、一家を亂し一國を亂す藝娼妓を爲す女子、又普通の娘にてあり乍ら、是等と同樣なるとをなす婦女子あり。まづ藝妓を爲す婦女子に付少しく述ん、

藝者の事實

實に婦女子にして悲しむべきは藝者なり。是等の女子に、元何故斯如き卑しき業を爲すやと問に、多くは親の爲とか、兄弟の爲とかにより、其助くる道を知らず、故に致方無く其身を獸物同樣の者となし、女の身として恥べき業を爲す。中には己の氣まゝにて身を賣る女子も有り。然し其內親の爲に爲す者多し。是を以て孝行と致すは實に恥しき事、又娘に是等の惡業をさせて、己等は遊びて、働ずして娘を賣て、食ふ親有り兄弟有り。實に赤をに青をにと申すは是等の者を指すと思ふ。又現今婦女子は德義を失ひ兎角働き無くして只々口先と其身をころがしぬれ手にて粟をつかむ如き事のみ考へ、きまゝに身を賣る者あり。實に人間は萬物の靈なる者、又人の前に恥を知るべき者なるに、斯如き事を甘んずる親兄弟あり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

又それを好みて爲す婦女子あり。實に婦女子の中間としてかなしむべき也。如何に働を知らず其親を助くる道を知らぬとて、斯迄其恥を知らざるか。藝者になりて、親兄弟を助くる考へなればなぜ藝者たるの本分を盡さざるや。なぜ藝だけして働らかざるか。實に娼妓にすら倘恥べき事を爲す、其身は藝者の看板を掛て政府にも藝者の願を爲し、「三味線、大鼓、舞、謠ひ、是等は皆看板であつて、其實は客取りを爲し、世の男子を誘なひ又あまつさへ、妻子のある男子にても容赦遠慮なく、口に甘き事を云ふて、其身を其男子に許す如き有様を爲し、味くだまして金をとり、己は外に幾儘を爲し、隠し男をこしらへ、或は淨瑠璃語り、或は「力取、或は「役者などの如き者に倒さまになり、其客より取出す金も、斯如き男子に入れ夫にて足らず、すでに親兄弟の爲に盡せし年期もすみ、己は身がるになり、世の婦女子の前に面目をそゝぎ、其悪業を改め、一家の妻となるの場合有ても、心づかず、又心づくも己の不處存の爲め、其不潔のわなに落入り、輕くなりし其身を又々年期を延て身を重くし、其悪業より逃れ出る事能はざるの身となり、其内には己は段々年を重ね、遂に其面に皺より、其皺引き伸して化粧をなす、其有様實に畫にかきし、お化の如き面をなし、己の年よりし顔形に心づかず、やはり己惚れて、化け居る有様、世の志ある婦女子の目に見ぐるしく、又あわれと思ふ如何斗りぞや。是等婦女子の「エサ」に甘まくかゝりて、身受してもろをもたれかれのしやべつなくして、妻子のある一家にとり、實に大切なる夫にても、妻の心を思ひやらず、妻子のあるを知りつゝ、取付き、其妻子を苦しめる婦女子の多きは、悲しむべく、又悪むべき事なり。故に是より「てかけ、又、妾、又内所がゝり。是等の悪業をなすてかけの事實をあらまし述ん。

刄ば無くして人を殺すはてかけ也

てかけとなりし婦女子に、種々なる仕方あり。第一は、正妻と同居するあり。又第二は、妾宅とて、家を別にするあり。第三、男子の卑しき爲と、又婦女子に意氣事なきため、人をつんぼか目くらの様に思ひ、人知らずとして、内所がゝりと云ふ、かげてかけとなり。妻ある夫をぬすむ婦女子あり。又身受せられ、其れがため、妻子が苦しむと知りても、断はること出來ずして、金の義理にて、其主人に從ふ婦女子あり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

それを斷はれば、或は恩しらずと思はれ樣か、又はだましたと思はれ樣かと、其れを恐れ、妻の心配を思ひやらず、啻に己を主人に好くせんとて、正妻になる目的なくても、悦でをる面を爲しをるてかけあり。又た、己惚てかけあり、己れ其主人より離るれば、其家立ぬ樣に思ひ、思ふのみか口に言ひなすてかけあり。實に悪くむべき婦女子なり。最早妻ありて長年夫と共に月日を送りしに、大膽にも、己れ無ば、其家立がたく主人は、本妻と心合はぬ故、迚も家治まらずなど思ひ、是迄で本妻丈にて、主人の用事も、又家を治むるとも、不都合なく出來たるに、今や夫に爲すべき本妻の働を妨たげ、眞正なる夫婦の中に立入て、其中を割る働を爲す。てかけなき内は、假令ひ妻愚かにても、夫はそれを助けて、妻と力を合せ、一家を納むる事、疑がひなし。然るにてかけ出來ると同時に、夫婦の中に、少しく隔てが出來、段々と夫婦の間遠くなり、妻を助くなどと云ふ美くしき愛情薄くなり、是まで、妻の爲す事左ほど、悪しとも思はざりし事迄、今はてかけの爲に、妻の爲す事一々悪き樣思ふに至り、遂に一家平安ならず、浪風あらくなり、常に愉快を失ひ、互に睨み合となる。段々長じて、ついに我をとらじと、てかけは妻にまさらんとし、妻はてかけの長ずるを怒り、妻君とてかけとの心の爭ひ一方ならず、ついに、内に滿て、外に發し、夫の面目にかゝる塲合を生ず。或家に於ては、主人の留主中は、何事もなく、妻君とてかけ誠にをだやかなるとを見受らるゝが、爰に主人歸宅するや、岩に水あたりてせざる如く、主人と云ふ一人の岩家内にある時は、兩方より夫にあたり、少しも穩やかなし。又或家には、主人の、見識にて、妻君に壓制を爲すなり、斯の家は前なるとは違ひ、主人の前にて、誠に兩方中好く見ゆれども、主人留主になると、其てかけをくるしめる妻君もあり。又斯の如くなると、てかけも主人留主中の妻の仕方により、己れ怒りを受るは當然なるとにてあり乍ら、てかけ悦こばず、主人の歸宅の時中々、てかけが好き面を致さず、何か心あり氣に致すゆゑ、主人は又々家にあると不愉快になる。さすがに主人も留主に、妻が何か云たか、どをかしたかとも言はれず、只々主人は己の本心に逆らつて爲て居る事にて、道理に合ぬ事ゆへ、仕方なく癇癪玉をこす。其爲めてかけも、妻君も、怖れて少しは主人に氣嫌を取る樣になる、そ

れより主人は、漸やく少しく慰さみ心になる、實にあわれなり。又一つには、てかけとなりても、惡しき考へ寄り抱く者も無く、少しは、妻君の心をも思ひやり、又主人の名譽も考へ、隨分妻を賞め又從ひ、主人にも本妻にも、氣がねして、心を遣ふてかけもあり。さりながら、いかに心をつかい、心配するも、道を外れて爲すまじき事を爲しつゝ、我本心にそむきたる働き故、身を粉なにするほど心をつこうとも、決して眞に十分妻の悅ぶ仕事でなし、妻は良人の爲に何如に忙がしく、又何如に日々貧しく暮しても、良人と共に力を合せ、其苦樂を共にしてこそ喜びなり、又いかに富貴に暮すとも、夫の心が他に向きをらば、身は樂にても、少しも心に喜びなし故に、てかけ全身全力を盡して、其家の爲をはかりても、決して、夫はよき事でなく、反つて、本妻の愚かを夫に知らせる事でありて、猶々妻君と夫の間遠くなるなり。すると、妻君はそろ／＼、怒りが初まり、ちん／＼つん／＼して、てかけより口を聞ても、決して返事せず、一ちど主人が癇癪玉出ぬとてかけと妻君口をきく事六ヶ敷、或時はてかけから口を聞ぬものもあれど、多分は、本妻の方から、物言はぬ樣になる。是は尤もの事也。さりながらてかけが妻ある人につきて、惡き事と思ひ、從てをると、斯の如き場合になる。本妻がものも云はず、なにを尋ても、しらぬと云て、聞入てもらへぬ時は、實に是より死する方が增しかとをもはる。さりとて、其事主人に言わば、主人は直に怒りて妻に當るゆへ、又主人の留主の辛棒出來がたし。故に何を言てもてかけの身故仕方なく、心にたゝみて、陰で泣いて居ることあり。其時心に思ふ、斯此き場合を逃れて、洗濯屋ひしても斯の如き事をなすは、實に／＼罪なり。てかけがある爲め、妻君も、斯苦しみなさるとゆゑ、主人にひまを願ひて出んと思ひしも、又主人の優しき言葉と、又義理にからまれ、其決心もしば／＼水の泡となる。よく忍べば忍ぶほど、主人は我の爲にしてくれる苦しみと覺りて仲々出る場合なくなり、妻の爲に思ひやるよりもてかけの心を思ひやるゆゑにてかけは少しくつけ込み、常に何か心配ある故、其面ついにあらはれ、又不愉快故に、或は少しく病氣になり、又癪氣を起して、主人にをもはせぶりをなす。主人殿は、眞面目になり、是は／＼あまり心配させる故、斯る病氣に爲りしと思ひ、是も又我の爲になす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事と思ひ、猶々てかけが可愛ゆくなる。すると、又々妻君の心穏やかならず、互の心の爭の中に立つは氣の毒にも主人なり。さりながら、自ら招く禍なり。てかけよき考へもありとは云へ人の良人を取る事ゆへ、實に道にそむき、婦人仲間としては爲すべき事でなし。故に苦しみあるは當然の事也。

實に妻ある主人に着きて、妻を邪魔がるてかけほど世に惡むべき者なし。初は、左程に惡しき考へ無とも、遂に深入して妻を惡む。妻立腹して苦しみ、夫にいへば、夫の權威にて、妻は遣込らる。妻は種々一家の事を思ひ、又其子孫の事を考へ、初は、夫に親切に忠告するも、聞入ず、又てかけも思ひやらざる時は、妻は怒りに満るなり。是れ尤のことなり。てかけが先づ假りに本妻の地位に立て、考て貰ひたし。己れ本妻にてあり、己の如きてかけが夫に有る時には、何如に思ふや。決しててかけのあるを悦ぶ婦人はあるまじ。又何如にてかけが良き人にても、既に妻ある男子に着くは良き人の證據にあらず、刄を持たぬ人殺です。深く主人を思ひ、家の爲め子供等の爲を思わぬ妻はなし、又良人を思へば思ふほど、てかけを惡むは當然なり。

實にてかけを持ちし男子ほど、世に氣の毒なる者はなし。なぜなれば、己の本心に背きて氣儘を爲す事故、妻に氣がねし世間に氣がねし、家に有ても、全く己の思ひのまゝにもならず、淫慾不潔の鎖りにからまれ、妻を慰さめんとするに、てかけ付きまとう、てかけを慰さめんとするに、本妻邪魔になる、實にてかけのある一家の内情は常に不潔の戰ひなり。妻が夫の所に行けば、てかけ立聞に行。てかけ主人の所に行けば、妻立聞す。斯の如き有様なれば、其内の下女下男又出入する者迄、正義無く、へつらい者斗りとなり、本妻の肩持ちするあり、てかけの味方らしくして、主人に、我身上を益する様取なし貰わんとて、てかけ方となりたる顔にて、又妻君方ともなるなり、てかけは其人々を親切なる者の様思ひ、己を信じて呉れ居ると思ひをると、又其人々にあやされることあり。實に一人の考のまちがいより、一家常に混雜にて、平和又安心なし。何如に本妻とてかけ睦まじく仲よく見え、又世間の人々實に彼の内は感心なり、妻君とてかけの仲よしと評判するとも、又主人がそれを名譽の如く致しをりても、決して内部は、少しも悦び安心なく、主人殿の心に、何つもなにか

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

氣にかゝりたる思ひあるもの也。妻とてかけは、常に心の内は殺合なり。古し加藤左衛門重氏の如き人にても、其妻てかけ、實に互に中よしとて、悦びをりしも、或時妻君とてかけ互に、碁を打ち、面白相に遊びをりしが、つひに疲れしにや、碁ばんの上に、互にひぢつき眠むりをりしが、其互の首の毛、蛇となりて、くいあいするを、重氏見て、驚ろき、初て、女の執念の怖ろしきを悟り、發心して妻子を棄て、高野山に上りしともをす事あり。實に最も千萬の事なり。世の中の妻子のある男子が、己の氣に入し女を我者として、我家に共に住まば、樂しからんと、一時の情慾の爲にまけて、妻君あるを、家にてかけを入れるとき、初はしばらく樂しからんが、遂に段々果が入て、妻とてかけ、合はざるものを合はせんとして、遂に男子が歎息して、幾度か加藤左衛門の如く、心の中に思ふやう、鳴呼〳〵いつそ、一人りが増しであると云ふ思ひを起すこと有り。さりとて、妻をも出だされず、又てかけにも、妻の爲にとて出す事も、あまり女にいくじなしといわれるも、殘念、嗟、どをならう、やけじや、酒などのんで、氣まぎらかしするじやと、男子ながらも、情慾に勝つとあたはず。妻とてかけは、それとも知らず、只々毎日妻君とにらみ合ふなり。妻有男子がいかに女を愛しくるゝとも、決しててかけなどには成るまじき事なり。男子は、家に入れば、我ものとなりて、滿足と思ひても、それは一時の慾にて、決して滿足をあたゆるものにあらず。若し眞に男子を愛すれば、一時怒りても決して妻ある男子に着く可らず。必々男子に苦しみを與ふるとなるなり。主人を思ひ、其子孫を大切に思ふ心あらば、なぜ妻ある男子に從ひて、其氣まゝを養ふや。如何に義理ありと、思ふとも、てかけになり義理だてして、其一家の亂れの元を作るは、婦女子の分にあらず。主人より義理づめに合ふとも、妻子のある男子は、妻の爲め大切なる人なり。故に、女子は女子の心を思ひやり、子孫の前途を考へ、主人に、怒られても、惡まれても、義理知らずと言はれても、妻ある人に着し婦女子は、主人より離れべし。なぜなれば、主人一人に愛せられて、萬人に惡まれ、又それのみならず、主人一家の害を爲すものなり。一人に惡まれて萬人の悦びとなるが異なり。同じ婦人に生れながら、人のをもちやとなるは、實に殘念になきや。主人、人の前に出る時は、い

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

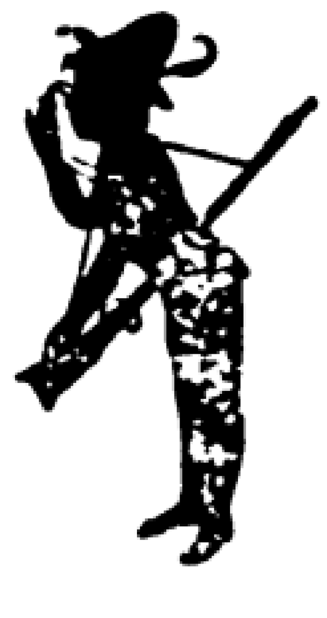
つも本妻をつれて出るなり。てかけが、いかに威張りても、公に人の前に出べき者にあらず、よし又つれて出るにしろ、決して公にはあらず。やはり、内所事なり。故にてかけとなりて地位高くなると思ふ婦女子は、全く己れを欺むき居るものなり。いかに貧しくしても、同等の人の妻となりてこそ、女の本分なれ。又中には、甚しきてかけありて、本妻を離縁させ、大膽にも、己、ゑらそをに後妻となりて、耻とも思はず、ゑらそをにして居る婦女子あり。實に見るだに堪がたく悪むべきの甚しきなり。實に其本妻にもめかけにも關係なき人々すら其事を聞や、實に齒がみなして、怒るほどの悪業なり。本妻は、夫の無情なると、其てかけの悪業の爲め、良人の權威により仕方なく退ぞき、陰にて泣き悲しみ、一時一分間も、其事忘れず、斯の如く人に苦しみを掛ながら、よくも、主人と樂しまんとは、眞に無情なる婦人なり。よしまた其中に子供が生るゝとも、決して正義なる者となる事なく、其子供を肩に、前途を樂しまんとは、實に考の無き事なり。麥をまけば麥生ず、米をまけば米生ず。よく理を考ゆべきなり。人は己の播く處ろのものは、又己のかる所となるなり。妻を苦しめながら、己等樂しく暮さんとは、實に耻しき心の廢れならずや、正義を以て世を渡らば、衣貧に乏しき事なし、人を苦しめつゝ食するより、寧ろ食せぬが増なり。人は正義を以て働けば少しも衣食に苦しむ事なし。衣食のためでなくば、何の爲に人を苦しめるや。鍋、釜さげるが忌なりや。左らば、てかけとなりし程、自らの分げんを考へよ。てかけとなりし程の婦女子にして、鍋、釜さげるが、あまりつらき程の分限の婦女子は、なきなり。元來富貴の内の婦女子にしても、最早や人のをもちやとなる塲合なれば、木綿とつく〳〵の着物で手鍋をさげるとも耻かしく又つらき程の地位にてはあるまじ、反つてそれをなすは己の本分を守るとなり。さりながら、ことわざに、女は氏無して玉の輿に乘る、と云ふことあり。幸に家まづしく育も、己の心正義にして、妻無き人に公に妻にするとてゑらばれ、正しく妻君となる婦人は、幸なり。さりながらもし、本妻にてなくば、自ら働きて分を守る方遙かに幸なり。或る金言に曰く、粟を食て互に愛するは、肥えたる、小牛を食て恨あるにまさるといふ事あり。實に萬物の靈たる婦女子は、少しく道理を考へわきまえ、正當な

る妻君を苦めぬ樣、婦女子の道を履め。女は一家の大切なる一本の柱となるものなれば淫慾、不潔に心を寄せ、人の害となる勿れ、女子は各々志を立て、一家を清く正しく樂しく治さめ、國の基となるべき子供を教育するの任重きものなれば、貧しく暮らすとも、一家の妻となるこそ、婦人の爲すべき事なれ。いかに、絹布に包まるゝとも、人のてかけ、めかけ、ないしよ、がゝり、などなすは、婦人の本分にあらず。又夫を思はぬ妻なければ、てかけ何如に善良なる考へを持とも、其働道先づ違ふ故に、妻も世人も賞めず悦ばず、主人がきまゝにまけて、女ぐるいする人の子供に、孝行又正義忠信なる子供は先々稀れなると、雨夜の星の如し。又男の子は必や父親のまねをなす。加之、女の子は小き事に心がつくゆゑ、之も亦兩親のまねをなすなり。斯して災の及ぶ所限りなし。てかけにして、眞心より主人を大切に思ひ、其家を大切に思ふ婦女子は、情慾に勝ちて其主人より離れ、世に一人立は出來ずとも、世には志し有婦女子も多くあることゆゑ、斯の如き貞婦人に近づき、力を合せ、人を喜こばせる者となること、國の幸ならん。又中には、卑屈なるてかけあり、若し主人よりはなるれば、外に道無きゆゑ、元のどろ水に落入るなり。又世に男子の助け無ば、兎ても立ゆかぬなど思ひ、先づマー、先きで妻になれぬともしかた無し、目前の事なりとて、妻有る人につく婦女子も有り。實に是等の婦女子は、いくじなしにて、氣の毒なり。主人にも氣の毒なり。斯如き卑しき恥しき事を思ひ、不義にをるより、下女づとめして働かん方寧ろ幸ならずや。

てかけして、誇り顏して居る程、いやらしきものなし。志し有婦女子や徳の高き妻君方は、心ひそかに思ふやう、哀れなる婦人かな、今若くして顏先きにほこり、又小智惠に己をあざむき居るか、氣の毒なる婦女子かななど思ひ居らるゝこと疑がひなし。それとも知らで、てかけ殿は我を忘れて己惚れをること、實に悲しむべきなり。主人も又てかけが出來てより、すでに鎖に繋がれし働き人の如く、どちらに行にも、自由にならず、妻に行ばてかけ纒といつき、てかけに行ば、妻が邪魔になり、殆ど中立して、大息つく事あり。是は事實なり實に主人は氣まゝの爲め、不自由の身となるなり。是に心づかぬてかけは、明き盲目なり、あわれなるものなり。斯く

不自由ゆゑ、エ、又別荘を構へ、静なる所にてかけを置き、恰かも親猫が子猫をクワエ隠し廻る如く妻の目を忍びつゝ、圍われをる、婦女子あり。實に人を聾か、盲目の様にしなしてをるてかけあり。實に悪むべき有様なり。實にてかけのために、苦められ、中には妻心配のあまり、氣狂となるあり。眞に氣の毒なり。實にてかけの罪なり。いかに男子女にいやしくても婦女子志しを堅く立て、其男子の淫慾不潔を改めるよう爲すは、婦女子の務めなり。又一家の幸福、一國の益なり。

然るに稍もすれば、婦女子より、男子をそゝのかせ、あまつさへ妻子のある大切なる男子迄を誘ひ、一家の苦しみを引起す婦女子多し。よく考へ省み、速やかに改むべきなり。中には、てかけをしても、決して妻を苦しめるなどと云ことを致さぬと云、てかけあらん。元より妻有事は承知故、それは餘り云ひすぎなりと思ふ女子あらん。さりながら、それは己を欺むくなり。其てかけの心を見るものなくば、それにて濟みもせん、よく己の心を捜し見れば、現にてかけにして、本妻ありてうれしやと思ひをる婦人が幾人かあらん、決してなきとなり。さりながら、其妻ある人に着くは、いや、又いやなる主人なれど、金の爲め故しかたなし、早く好塲合あらば、其主人よりはなれ、己の思ひのまゝにしたしと思ふ、てかけは、妻ありて幸とをもふならん、左れど之も亦決して心の底より妻を愛するにはあらず。妻をてかけが愛すれば決して妻ある男子につかざるなり。それはよく／＼胸に手を置き人の顔を見ずに考へて見るべきなり。てかけになるほど、世の多くり人に對し多くの不幸を與ふるものはあるまじきなり。



小説

春風裡

トオストイ氏作

不知庵主人譯

其二

到頭春となッた。自分の愁悶は悉く去り、夢の樣な目的もない希望と心待の聯續が來ッて、自分の日を送るさまは全で變り、毎日ツオニヤと戲けちらし、是迄になく音樂に耽り、新に鋭氣を發して勉強し、翠滴たる庭を散策し、蔚然たる大木の下に躊躇し、唯夢想して、渇望して、思案してばかりゐたー しかし何を夢想し、渇望し、思案してゐるか、之を知るは獨り神ばかりだ。

時に依ると一ト夜眠らずに窗側に立ち、取分け月夜の晩は長い寐卷を纏ふてマカアに知れぬ樣にそッと家を飛出し或は観臺に上り、或は露を踏みしだきて池畔を逍遙し、夜もすがら寂寞を樂んで浮れた事もある。

斯くばかり自分が迷ふてゐる幻像を思出さうとしても中々憶出されず、偶たま思出した處で如何しても是が我が自身の頭腦から浮んだ事とは思はれぬほど、全く今日の實際生涯とは遙かに隔絶してゐる。

五月の末終にセルギイ、ミハイエロウヰチは歸て來たが、此歸郷は全く意外で、自分共は観臺に集り恰もマカアが茶を命じた處である。

庭は青葉茂り、鶯は木蔭深き中に巢を作り、綿蠻なる聲を放て長閑けき麗かな黄昏を送り、連翹は蔚として香芬ゆかしき蕾を持ち、今にも破れて馥郁たる香を張らさんとし、樺の植込はコンモリとして夕陽の赤き光を反射し、観臺は蔭になりて既に涼しく、夜露は草葉に輝りて、背戸には草野歸りの人聲喧しく、牛は其歸りを待て夕風に鳴く。

シャイ、ニコンは灌水車を馳らして観臺の前に來り、天竺牡丹の花檀を巡りて水を漑ぎ、我が前の圓卓には輝く樣に磨き込だ「サモワール」と乳酪「パンケーク」「タート」等さま〳〵のものが陳べてある。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

マカアは肥つた白い手で家婦振りに茶碗を一坐に配り、自分は浴後の渇に辛抱しかねて乳酪と共に麵包を喰ひ初めた。

セルギイ、ミハイエロウ井チの來着と第一に認めたはマカアで、

『オヤ…まア、本統にまア、今貴君のお噂をしてゐた處です

自分は思はず飛上ッて逃出さうとしたがセルギイは早くも自分を押へ、自分が湯上りの廣袖を着し白布で濡髮を結んだ態を見て、

『地方にゐると嗜を壞すネ』と可笑しさうに笑ひながら、『グリゴリイの前ぢやアそれで可からうが、私の前へ如何したもンだエ…』

自分は少しく羞明ろンで急ぎセルギイの手を振りもぎッて

『ぢやア待てゝよ…直ぐ來ますから』

自分は慌てゝ部屋に行き、身粧りをして鏡に向ひ、髮を結び直して慌てゝ再たイキセキと戻ると、セルギイ、ミハイエロウヰチはマカアと要談の最中にて、自分と顏見合せて打笑みわざと其要談を續けて、我が家の所有財産は何れも好氣配であるを告げ、此上はポコロオウスヰイに留まるべき事もない故、秋になればソオニヤの敎育の爲め聖彼得堡に行くか、左なくば瑞西或伊太利に遊歷するが宜かるべしと云ッた。

『貴所も御一緒に』とマカアは云ッた、『私共ばかりですと孩兒が森の中に踏込ンだ樣に迷ひ子になります』

『お前達と一緒なら世界を半分歩行いてもいゝ』と半分戯譃に半分眞面目らしく答へた。

『左う…そンならネ』と自分は云ッた、『一緒に世界を一ト週りしませう』

『私の用事や何かは捨て置てかネ——時に私が歸てから後は何をしてゐたエ？』

夫から自分はセルギイに別れてから以來の樣々の樂を物語ッて少しも寂寥を感じなかッた顛末を話すと、セルギイは恰で自分が穉ない子供でセルギイ自身が其保姆である樣に自分を稱譽して可愛がッて呉れた。で、自分は一から十まで何事も物語る氣になッて、唯稱賛されべき事ばかりでなく、面白からぬ感情を起さしむべき事と承知しながらも、悉く打明けて語り、頓と自分が懺悔人となりセルギイが懺悔僧となッた樣である。

其晩は何となく嬉しくて、茶道具を引下げてからも猶は觀臺を逍遙き世智辛い浮世の物音が次第に失くなつたのを氣附かなかつた。

虚空は何處ともなく花の香で充ち渡り、露は草葉を濕ほし、鶯は連翹の木蔭に囀り、澄渡つた星空は頭上に蔽ひ來つた。早や日は暮れて夜の世界と變じ、觀臺の屋根を張つた帆木綿の下から突然蝙蝠が飛出し、目まぐるしい樣に飛び轉つて自分の白地の衣服をハタと打つたので、自分は思はず聲を上げやうとする其途端に、蝙蝠は再びもとの木下闇にまぐれ込んで仕舞つた。

『ボコロオウスキイは好いナ』とセルギイは話頭を轉じ、『爰で生涯を送りたいもんだ』

『そンなら左う遊ばせ』とマカアは云つた。

『左うしたいナ』とセルギイは繰返した、『儘にならぬ浮世だ

『貴所は何故令室をお持ち遊ばさないノ』とマカアは訊ねた、『貴所の樣な結構な方でありながら』

『私は氣儘が好きだからチ』とセルギイは笑ひながら、『お前や私なンぞはもう婚禮の話をする年齢でもない。私の朋友は何れも私が女房を持つとは思はない。私も其所存で居る………本統サ』

最后の言葉は態と活氣を揃えて強めたらしく自分には思はれた。

『御調戯仰しやる』とマカヤは云ッた、『何ですチ、三十六で居らしッて……それで浮世をお見捨て遊ばすと云ふ事がありますか』

『いや、私は氣儘に獨身で居るが所望なんだ。………婚禮の事なんぞを思ふと又別に變ッた思案が出るカシヤ………』と點頭て自分を指し、『マカア、お前や私は兎も角も此娘を立派な處へ嫁付けて、幸福に暮すのを見て安心するが順當ぢやアないか』

此聲と言葉の下には頗る心苦しい分子が秘れて居たは自分には慥に感じた。渠は暫らく默然とし、マカアも自分も更に口を開かなかッた。

『まア考へて御覽』と何だか落付かぬ躰で席を離れ、『ひよッと如何かした調子で十七やそこらの女、例へば此カシヤの樣な――とンでもない例を持出したもンだが――早い話が此

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

様な若い女を女房にしたら』と云て渠は笑出した。自分も何故だか分らぬが笑出した。

『如何だヱ、極正直に心様を言ッてお見』と自分の顔をじッと見て、貴孃の様に若くて何事も物珍らしく花やいでる方が年を老て半分ぼけてゐて樂ばッかりしたがッてる者と一緒になッたら定めて不幸福だと思ひませう、若い人の心には面白い希望が種々雑多燃立ッてるもんだから。

此質問は自分にも不愉快に思はれて、暫らく默然としてゐたは、全く答へる方角を知らなかッたからで、渠は打笑みながら再び言葉を次ぎ

『何も貴孃に結婚の申込をするンでも何でもないが、極正直な處を聞かして貰ひたい。若し夕暮に庭を逍遥く時貴孃の妄想に浮ぶ良人は私が今云ッた様な男であッたなら如何でせう？こンな男は實に厄介者で、夫こそ亭主に持ちやァ不幸福でせう？』

『いゝヱ不幸福ぢやァありません、けれども――』と自分は言ひ掛けると、

『けれども慥に幸福ぢやァない』

『いゝえ、左うぢやァなくッてよ。妾は……』

『もう云はないでも可い。能く正直に言てお呉れだ。左う云ふ結婚は若い女の方でも勿論困るだらうが、私の方でも随分不幸福なもンだ』

『本統に面白い方だよ』とマカァは晩餐の支度に掛らんと席を起ちながら云ッた。『何歳におなり遊ばしても毫ともお變り遊ばさない事』

マカァが席を起ッた跡は、セルギイも自分も默然として自然と共に沈み、鶯がたゞ鳴くばかりである。此鶯の聲も朝の鈴を轉がす如きとは變りてしッとりと長く尾を曳き、庭一杯に其調子を響かすと、遠く離れた木叢で第二の鶯が其後を引受け、再び長く尾を曳いて美はしい音を漲らせ、暫時に夜の世界を其澄清玲瓏たる音調をもて充たした。

庭男は道具部屋の寐所に引込み、嘹然たる二個の笛聲が大路から聞えると條忽ち元の寂莫にもどッて、夕風は木の葉をざはつかせ日被はのどかに動揺して一陣の風と共に新たなる香は觀臺に瀰漫した。

默然としてゐるも何となく面白からず自分には感じたが扨

て如何して口を切らうといふ方角もなかッた。

『あァ好い心持だ』とセルギイは到頭口を切ッた。自分はほゝ、ッと嘆息をした。

『如何かおしか？』と渠は尋ねた。

『いゝえ、好い心持です』と自分は答へ、再び默然として沈まり返ッたが、自分は何だか自分の言葉が若しやセルギイを老人だと思ふ如く言ひ過して機嫌を損じたのではあるまいかと考へて、如何かして謝言を述べ若くは解釋を言はうとしたが、如何云ふ風に云てい丶ものやら解らなかッた。

『左様なら』と突然セルギイは起ッて、『今夜は母と一緒に夕飯を喰べる約束でしたから』

『それでも是から「ソナタ」の新曲を弾きませうと思ッて』

『また今度』とすげなく言捨てた、『左様なら』

自分は全く機嫌を損ねた事に氣がつき如何して取繕ッていゝやら分らなかッたが中々に悲しくなッた。

マカアと自分は玄關の式臺まで送り出でセルギイの後影の見えず其馬蹄の音が聞えなくなるまで見送り、再び觀臺に戻て庭を眺ながら上下し、夜色沈として朦朧たる淡墨の中に消逸し、我が夢想にて視聽すべき事々物々に心を通はしてゐた。

斯くて其後セルギイ、ミハイエロウ井チの訪問が二度三度と重なる中に、例の奇怪な談話の爲に自分の心を騒がした不快の面白からぬ情は消え失せて、セルギイは一週間に二三度宛も自分の家に來て、偶さか來ぬ事があれば太く自分は失望するばかりか、明けても、暮れてもセルギイが來なければならぬ樣に思ッて。

セルギイは自分を見るに親友を以てし、忠告を與へ同情を表し折々は叱責し度々自分を見て微笑した。しかし其淡泊な好誼と深切の下に自分の少しも關らぬ何物かが潜伏してゐるらしく自分には思はれた。

マカアから聞けば、セルギルは同住の母の世話、自身の財産の管理、並に我が家の後見の外、頗る面倒な事件に縛られて困められてゐるさうである。

しかし此或る事件に關して其意見若くは其企圖を聞かうとしても渠は更に一ト言も云はず、唯妙に前額に皺を寄せ恰も『そンな事ゥ聞くな、お前に關係の事ゥおぢやァない』といふ如き風で、直ぐと話頭を全く異ッた方角へと向けて仕舞ふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

初めは何ぞか自分も面白からず思つたが、段々馴れて來ると、セルギイが唯自分に關係した事だけ云ふのが却て有躰で快くなつた。

殊に又自分の氣が揉めたはセルギイがとんと自分の人品に關して平氣になつた事で、自分を美人と思ふといふ容子を更に其言葉或は瞥見に現さないで若し萬一渠の面前で自分の容儀を稱揚する人でもあると眉を顰めて苦笑した、又た何か晴の時にマカアが自分を粧飾せやうとする流行の衣裳や髮貌は却てセルギイの嘲謔冷笑を買ふばかりで、是にはマカアも自分も頗る當惑した。

自身の心だけでセルギイは自分を愛して居る事と獨り決めて居つたマカアは、何故セルギイは自分を愛して居ながら華美に身を扮させるのを好まぬかと荐りに當惑の躰であつたが、自分は逸早く其理由に感附いた。セルギイは虚飾が嫌ひで成るべく質素を欲するのだといふ事に氣が附き、衣裳髮貌等悉く華美を捨てゝしまつた、が暫らく經つと質素一方でそろ／＼粧り初めた。

セルギイ、ミハイエロウヰチが自分を愛して居る事は全く確實で、子供としてか又大人として歟夫は云はずともの事だが、兎も角も愛されて見ると自分がセルギイの思つただけである事が何となく不滿足で、如何かして實際よりは一層見上げて貰ひたさが慾で、心ならずもセルギイを欺むかうとした。

自分の容儀相貌はセルギイには殆んど見馴れ如何に粧を凝しても無益であるが、我が心の奥底には猶ほセルギイの眼の屆かぬを知り、此點からセルギイを晦まさんとして、セルギイが調戯に紛らして秘さうとしながらも『中々貴孃は一と癖あるな』といふ時は眞實嬉しくて／＼堪らぬ。

斯う云はれる時の自分の心は如何である？嬉しさが込上げて胸はワク／＼として躍り出し深意と滿足で心一杯である。

其時は斯ういふ場合で、グリゴリイ爺が孫を可愛がる味が分つたと云ふた時と、歌や小説を讀んで涙に暮れたほど感動したと話した時と、シユールホフよりモザルトが可いと主張した時だけで、何故こんな事を云つたもんだか其理窟を知らぬが、毫しも正鵠を誤らず善惡邪正を識別したは今から考へれば全く不思議である。

セルギイ、ミハイエロウヰチは自分の一事一行に少しも口出しをしなかつたが、萬一自分が曾て好んだ遊戲で自分に不似合な者でもあると其眉を顰めるので直ちに了解し、又何事かで自分に忠告を加へやうとする時は自分は其云はんと欲するものを既に豫知し、又何事か問はんとして自分を一瞥する時は其一瞥だけで自分は逸早く渠の心を悟り、何事につけても此時には自分の心だか渠の心だか彼我殆んど同躰となつて、左もなければ元來癡愚駑鈍であるべき筈の自分が頗る俊爽鋭利となつた。

知らず識らざる中に自分は何時の間にか變化して、マカアからソオニヤ一家の婢僕を見る眼が變つたは勿論自分自身の日々の仕事にすら變動が起つて、是までは時間潰しで唯徒然を慰むるに過ぎなかつた讀書が此頃第一の娯樂となつたは、セルギイが選擇んで與れる書物であるからで。今までソオニヤに敎へるが中々太儀で自分には頗る面倒であつたが、此頃は、賞められるが嬉しさにソオニヤの進歩が頗る樂みとなつた。

又是まで音樂の稽古は出來ぬ事と考へてゐたものが、セルギイに褒められたさが一杯で一生懸命に凡そ五十遍も全じ曲を繰返し、マカアは終に堪りかねて耳に綿の栓をしたいほどである。

又是まで自分の同躰の如く思つたマカアが何だか別物の如く思はれて、初めてマカアがソオニヤと自分に對し母となり朋友となり奴婢となつてゐたは全くお勤ではなくて其愛念を自分姉妹に献げてゐた事を悟り、其有難味は骨身に染みて中々この恩報じは出來さうに思はれぬ。

我が家の僕隷奴婢は惣て自分には新らしくなつて、十七年間其中に生長つた自分であるが、初めて渠等の間にも自分と同じく悲喜哀歡の情が行はれてゐるを悟つた、庭も森も圃も何も彼も我には獨り新らしく是までになく其美しさに感じた

或る日セルギイ、ミハイエロウヰチは人生の至大幸福とは他人の爲に生存して初めて認め得べしと云ひ、初は其意味が非常に分らなかつたが、段々考へて今は悉く亮然として其味ひあるを悟ると共に、我が周圍の各事各物は是までになき異觀を現はし、何事も一切萬法惣て面白くなり、子供の時から朦朧の中に包まれてゐた事物は此セルギイミハイエロウヰチの

一言に依て歴々として明らかになり。我が心は歡喜の情で一杯になつた。

此夏は床に入ても寐られぬ事が度々で、其時は起きてマカアの許に往き、幾度となく繰返して自分が幸福である事をいふと、マカアも全じく幸福で頗る滿足であると云ッた。勿論自分が幸福であると云はずとも誰にも知れた事で、マカアは時に依ると自分を叱りつけ無理に寐床に歸らしめたこともあるが、此時は夜もすがら將來のさま〴〵を心に描ていゐた。時に依ると嬉しさが胸一杯で思はず起上ッて跪き一心に自分の生涯を神に祈請した事もある。斯る時四邊は寂然としてマカアの寐息時計の音寐おくれた蠅の羽音の外は闃として戸も窻蓋も閉ぢられたる其暗澹たる中に自分は一人危坐して心は嬉しさが湧立つ樣にユラ〳〵して何時までも此部屋の此寐床を離れず此禧々たる情を拂曉の空に雲散せしめざらん事を望んだ。

我が夢想も我が希望も我が祈請も此寂寞暗澹を賑はし枕上徐ろに怡然として唯渠を懐ひ渠を慕ふてゐた。去かし是が『戀』だとは自分夢にも氣が附かぬ。

兒藍

林のぬし（下）

しづ子

およしは急ぎ着物を着て夫の居る方へ行つて見升と、夕部の老人が脊負つて居たずだ袋を前へ置いて、袋の口を解く處でした。これはしたり、なんたる好運か、これこそ舌切雀に貰つたといふ輕いつゝらに勝るとも劣るとはない寶の袋で、およしは見るとから腰を拔かすほど驚ろき升たが、其驚きが納るか納まらぬに袋からこぼるゝ計りの古金銀を一枚二枚と前垂の中へ拾ひ込み始め升た。拾へば拾ふほど湧き出すかと思はるゝほどの夥しい數に果は息もとまらん計りに呆れ、數へるとも忘れて手を止め升た。夫も嬉しさを滿面に現はして、

これ丈の金をどふつかおうな？

夫婦は姑らく談合に時を移し升て、とう〳〵二十枚ほどとつた殘りは悉皆裏へ埋やうといふことに諦まり升た。そこでさ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

し當りつかわふといふ其二十枚の外は穴を掘つてコッソリ人の見つけぬ様に匿して仕舞ひ升た。殘した金子は夫が市へ持つて行つて買ふとにきめたものを澤山脊負つて歸つて來升た。何かといふに先づ鯛が一枚、酒二樽、およしの鼈甲の櫛一枚、其の外砂糖やら茶やら銀の懷中時計やら博多の男帶やら縮緬の頭巾やら赤ん坊のおもちや種々と赤い鼻緒の少さな下駄などもありました。二人の悅びは譬へるにものもなく、およしは煮るやら炙るやらの暇に、櫛をさして見るやら、甚八は帶をメて見るやら時計を下げるやらして居る中御馳走が出來て、飲食する中に主人は平常餘り嗜まぬ酒を過してあと先も分らぬ醉どれになり、歌つたり躍つたりし始め升た。これにはおよしもドッキリ胸を痛め升た。其中モット金を掘り出して市へ買物に行かふといひ出し升たから、およしが不承知をいふと、主人は捲舌て何かグヅ〳〵言ひ始めて嫁に來てかつひぞ荒い言葉もかけられたことのないおよしが果はさん〴〵に打擲されるやうな始末でした。きのふまでもけふまでもあれほど仲の好い夫婦が喧嘩を始めて女房が打たれるなどゝいふは實に不思議なとでしたが、其中に夫は疲れて倒れたまゝ寢てしまひ、女房は隅につぐんで泣いて居り升た。

翌日は二人ともふさぎ切つて互に物もいひませんかつた。夫はおまけに恐ろしい頭痛で食事も出來ず、仕事に行くなどは思ひもよらぬとでした。一日措ひて其次の日は主人が氣分ももとの様になつたとて、早速お金を掘り出し又市へと參り升た。さて買ひ整へた衣類、諸道具、食物などは迚も脊負ひ切れる處で有ませんかつたから、とう〳〵荷車を買つて積み込む様な譯になり升た。序に二疋といふ馬もつけ、自分は手綱をとつて家路を歸ると待詫る女房は此威勢を見て流石に大悅をし升た。

先づ二人してくさ〴〵の荷物を下ろしたり包を解いたりし始め升た處が中〳〵手狹な住居にはいりさうにもありませなかつたから、據なく前の草原へ幷べ始め升た

ソラ、これが金屛風だよ、御覽、本銀の鋲が打つてあるぜ。

と主人がいへば、女房は請とつて、葱畑の上へ擴げながら、

マア、なんと立派なもんじやないかー驚くネ。

こいつはオランダから渡つた鏡だぜこんなもの見たとはねいだらう。

と夫が又、干棄のぶらさがつて居る荒壁へ立掛けて見せ升したが、なるほど横にしても縦にしても戸口からははいらないほど大きな代物でした。荷車へ積んだ品物を下ろす丈が半日の餘かゝり升て、家は勿論足の蹈まへ處がなくなるまでになり、前後の空地さへ處せまくなり升た。此品物の中には蒔繪盆、廣蓋の類、寄せ木の書棚、違棚、其外立派な額面や毛氊など、其中には食るもの、着るものもあり、おまけに讀めもせぬ書物などまで有升た。臺處のいとゞ狭い處へ道具澤山になつて料理するさへやうやくでしたが、とう〳〵午飯の仕度丈は出來て、夫婦諸共飲や歌への大騒ぎをいたし升た。女房は思ひつひた樣に

一寸、おまへさん此分ではどうしても家を建てなければならないじや有りませんか？

夫は手に酒の徳利を持ちながら、

そんなとはどふでも好きにするが好い、人目は管はいないから、さうだナマア建るとしようよ。

オヤ、おまへさん徳利からグイ呑とは恐れ入りますね、おまへさんやあたしほどの身上になつたら、そんな品のわるいとはするもんでは有ませんよ、ソラどこかにオランダとかのギヤマンの杯が有升たつけ。

主人は中〳〵其いふとを聞かず、徳利の口から呑む方が結句勝手だといひ升た。さうすると段〳〵酔の廻る女房はヤツキとなり

勝手もよく出來たチ、あたしの分も呑ふなんぞと思てさ。

さうすると又たも一塲の喧嘩となつて、酒に呑まれた主人はしたゝか女房を叩升た。翌日主人が大工を招いてこれまで畑になつて居た處へ大きな家をたてることに取かゝり升た。およしは勿論建築のとなど一向不案内でしたが、職人の働く手際にはホト〳〵感服するほどで、間もなく此新築へ引移ることになり升た。然るに主人は兎角酒を嗜む樣になり、朝から晩まで酒氣を帯びて居る位ひでしたから職人どもの取締は出來ず、畑へ敷ひた毛氈の上に加はへ煙管で樂寐をして居る間に一ツ二ツと金目の道具を盗まれたも不思議ではありませんかつた。おまけに職人どもの盗まないものは雨や塵が汚し升てだいなしにし升た、併し夫婦のものは格別それを氣にもせず、また半分の餘金銀の殘つて居るに安心し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て、平氣で家の造作も飾りつけも仕舞い升た。其中下女を置く樣になつて、およしは何もかも手一ッにする昔しとはうつて變つて重ね着の裾を引いて濟ます樣になり、赤ん坊は繪紙やおもちやをいくらでも好ほどあてがはれ、餅ぐわしや、有平糖を食べ過ぎてお腹を惡るくするほどでした。木樵で有つた主人も今は仕事に行ふとも思はず、ダラ〳〵家に入り浸つて、遲い朝飯をしまへば、午飯の出來るまで寐轉ろぶといふ樣になり、運動のたらぬのと呑過ぎで此頃は顏色さへ靑ざめて來升た。時々金持といふは大したものだなどゝいひ升たが、不思議なるには、以前其日〳〵と稼いで居た時の威勢はどこへか行つてしまつて、ポンヤリと弱々しくなり升た。それ故、およしは夫が普段長羽織に博多の帶〆る樣になつたは好いが、元の樣に機嫌よく、丈夫さうな顏が見られないのは殘念だと思ふ處も有り升た。

第一金の遣ひ道について夫婦相談する時つひに心持の出合つた例はない、毎日の樣に喧嘩し、互に愛想のつきると計りでした。およしは夜枕に就いて泣寐いりをするとが度々あり升たが、これは貧乏の時には一切ないとで、自分でもお金持になつて奧樣氣どりで居られるのにどういふ譯でかふも面白くないのかと不思議で堪りませんかつた。毎朝主人がまだしらふで居る中二人してかふしたら樂しからふといふとの工夫を凝らして見升たが、これこそと滿足する出來ばへはなく、段々心わるいと計りつゞく樣になり升た。ある時およしが長棒の籠を拵らへて乘つたら面白からうと考へついて、例の金の埋めてある處へ行くと地面が踏み固めて有つて容易に堀れませんかつたから、下女を呼んで始めて秘密を洩らし、さて堀り出して與れたら、金の小判を一杯やるから、人に决していふのではないといつて固く口止めし升た。下女が大骨折で堀り出して袋の中を見れば、一杯あつた金銀も最早殘り尠なになつて居升たが、矢ッ張りお籠のとはやめやうとはせず、自分で市へ買に出かけて行くと、其留守に下女が御番處へ何か訴へ出たものと見へて、およしが籠に乘つて歸つて來ると家には捕手が幾人か待つて居て、此女こそキリシタンの魔法をつかつて地の中から金銀を堀り出すさうだ、容捨ならぬ處業によつて、是非御法通り處置せねばならぬ、イザ尋常にとかなんとかいつて居升た。およしは何より先に二階へ寐かして

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

置いた赤ん坊の上を思つて、捕手の中をくゞり拔け、寐て居る赤子を抱き擧げて、夫をさがしに行くと夫はいつの間にか下へをりて、捕手の役人と口論をして居る樣子がいつもながら酒に醉ひつぶれる計りになつて居り升した。其中捕手頭と思はれる樣な人が大聲あげて、

グヅ〳〵いふなら夫婦とも搦取れ、ソレッ

といふと、夫が大怒りに怒つてスポンと、力一杯其人の頭を擲ると、不思議と〳〵其人の頭は丸で張子の樣にコロ〳〵と書棚の下へ轉げ込んでしまひ升た。およしは心の中に、どふも變だこれが、本當のものかしらと思て居ると、一同が騷き立ち、下女までが「人ごろし〳〵」と呼はり升た。マアどふしたらよからふと思ふ中に、捕手が夫婦をとりまいて、「モウ致し方はない、二人ともどふせ首のない奴等だ、赤ん坊は取りあげてしまつて、縛り擧げつちまはふ」と恐ろしげな聲していひ升故、およしは悲しくてたまらず、荒くれ男の前へ身を投げて詫をし升たが、一向聞入れる氣色なく、二人はとう〳〵引たてられるといふ處でフト眼を覺ますと、自分は相變らず元居た處にチヤンと寐て居て、赤ん坊は側に指をチウ〳〵吸ひながら眼を大きく開いて居升た。

アレマア、そんなら、矢張り金持ではなくつて、何もかも夢であつたのか知ら、どふりで捕手頭の人の首がコロ〳〵落ちたなんでも變だ、夢の樣だと思つたが、ア、矢張り……

と獨り言をいつて、嘆息をつき、枕紙が涙で濡れて居るに氣がつき升た。

それでうちの人は呑んだくれではなしあたしを打もしないで、毎日機げんよく仕事に行く、其方がいくら勝しか知れない、いくら勝しだか……

といひながらまだ考へて居ると、夫の何氣ない元氣の好い聲で、

およしや、およし、モウ起きないか、遲いぜ、お客があるに早く起きて焚つけろや、

といひ升から、およしが其姿を見ると、いつもの通りな股引をはき半天を着てニコ〳〵して居る處は長羽織をズラ〳〵着流し、癇癪筋が靑く出た顏して魚の燒る處を眺めて居た夢の人とは月と鼈甲ほど違ふので、嬉し泣にワツト泣出し

おまへさん、わたしは恐ろしくこはい夢を見てさ、あんな

に二人が喧嘩計りして居る樣だつたらどふしよふチといひ升と、主人は大笑ひに笑ひながら、

なんだナ、夢を見たつて泣く奴があるかへ、さうさ喧嘩するともない樣だナ。それはさうと夕部の客人が居るぞ、ソレ早く。

アヽ、さうとも直ぐ行くよ。

といつて急いでそこらを片づけると、客はモウいつの間にか起きて、さきがけに

イヤ、おかみさんお早う、何です、夕部はよく寐られ升たか、よく寐たともいへませんチ、

老人はニコ〳〵して、

わたしはおかげでよく寐ました、夕飯もあの通り深切に、恩がへしも何も受ける積りなくおふるまひ下さつたからチ

と意味ありげにいひ升と、およしは

本とうにさうですよ、あなたがさういふ譯のあるお人とはそれこそ夢にも知りませんかつたもの、うちの人がいつて聞かせて呉れるまで、ゆつくりお休みなされなかつたといふは、實にお氣の毒です。私たちは人間の側へ來ると、其人たちの夢見の障りになるといひ升。アヽそれ〳〵あの袋を泊り代に置いて行ませうかチ？おかみさん、

およしは思はず顔を赤めて、あとへさがり、

いゝへどふいたし升て、飛でもない御無用になさつて下さいませ、

それはまたどふいふ譯で「とニコ〳〵しながら」一杯金銀がはいつて居升ぜ、それに置て行ても些か差支ませんぜ。」

それ計りはどうぞ御無用になすつて下さい、さうしてどふぞうちの人へも遣るなんて仰しやらないで下さい、何の夢も見ないで、わたしの樣な心持にはなつて居ませんから。

丁度其時主人が物置へ何かとりに行て歸て來升たから、老人は

イヤ御主人、今おかみさんに夕部からの御面到をお禮いつて居る處でしたが何か其お禮の印にあげて好いものが有れば………

女房は心配さうに夫の顔を覗いて、口早に、

ナニ、何も不足は有ませんチ此まゝで結構じや有ませんか

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

といひ升たが、とう〳〵相談づくで、機一丁と鍬一丁貰ふとになり升た。老人は遠慮する二人に其二品を約束して丁寧に禮を述べ朝飯に強いて止めるも聞かず出て行升たあとに、およしは心の中に今で考へれば機足一ッで何も不足はないが、きのふの朝古金銀の一杯はいつた袋をやらふといはれて、それを斷り機足と取かへて貰らわふなどとは夢にも思はなかつたと今まで知らなかつた物の道理を大きに悟り升た。

(完)

問答

問　書狀を手紙といふは何等の意味に基きたる詞にて侍るや

答　伊勢貞丈の説に手紙といふ詞は近年より行はれ來りたるものにて手簡といふ詞より轉じ來りたるものならむ手簡ばシユカンなるを、テカンと讀みテカン轉じて手がみとなりたるならむと有之候。

問　序ながら伺候。書狀の發端に一筆と書出す事文例となり居り候が是は如何なる意味にて候や。

答　細川幽齋の書禮抄に、一筆と相認る事ば忙はしさに、取りあへず申さず候はで叶はざる事を、些書き付て遣す此一筆にて用の相調ふ事をいふなり。おしたてゝ遣す狀に一筆と相認むる事は其詮なき由申し傳ろ云々と有之候。成程尤らしき説にて御坐候。然れば是にて御勘考下さるべく候

問　日本國中何れにか下婢學校と稱すべきもの有之候や。

答　地方の事は一々委しく存じませぬから斷言は出來升せぬが未だ餘り承らぬやう存候。但東京にて或る學校内に下婢たる人の爲めに夜學の便を與ふるの仕組を建てゝ徐々に實行し居られ候へ共、下婢たる資格を具へしむとの目的を以て、設立せられ居るものは無之哉に思考いたし候。願くはかゝる學校の一日も早く設けられ度ものにて候。

問　嬰兒のシヤツクリを止むる良法は

答　砂糖を少許甜めさすれば直に止り候。

問　東京府下に於ける外國人在留の數は

答　昨年十二月末の調査に依れば總計八百人内男五百三十八人女二百六十二人ありとの事です。

問　動物の孕胎より出產迄の期限承り度候

答　餘り廣大なる御尋にて俄に御答は出來兼候が先づ家畜の分だけ申上升う。

○馬は　四十八週半乃至三百四十四（最短三百七日、最長四百十二日）

○牛は　四十週半乃至二百八十四日（最短二百四十日、最長三百十一日）

○羊は　二十二週乃至百五十二日（最短百四十六日、最長百五十七日）

○豕は　十六週乃至百十六日（最短百十二、日最長百二十日）

○犬は　九週又は六十三乃至六十五日

○猫は　八週又は四十六乃至六十日

○兎は　三十日

○驢は十二ヶ月

○鷄は　二十一日（十九乃至二十四日）

○○○七面鳥は　二十六日乃至二十九日

○○家鴨は　二十八乃至三十二日

○鳩は　十七日乃至十九日

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通信

淡海子編

●三重縣通信

◎嶋川まき子佐伯ひで子　さきに女子高等師範學校に入りて高等師範學校科を卒業したる嶋川まさ子、小學範師範學科を卒業したる、佐伯ひで子は去る二十四日同校に施行したる、第三回卒業授與式の際同證書を授與されぬ、

◎新宮幼稚園　縣下紀州新宮小學校の付屬幼稚園は、昨年の町會にて之を廢することに決したるが、昨今同町の有志者諸氏發起となりて、私立幼稚園を設けんと區民を誘導しこの程其議も纒まりたれば、其筋の認可を經て來月中旬頃開園式の運びに至るべし、

◎賦金　この程發布されたる本年度の豫算によれば、本縣の賦金は五萬三千六十四圓九十錢なり、

◎養正學舍長の死去　養正學舍長、大西重寛氏は去る十五日死去せしに付き、同學舍は十五、十六の兩日休業して其吊意を表せり、

◎「ドレナ」孃の披露會　「ドレナ」孃は津市に永住して一致教會のために働かるゝとなりたれば、女史と共に働かんため近頃來津せられたる牧師、木村鎭太氏と共に「ドレナ」女史の宅にて就任披露式を去月十二日に開きぬ當日來會せし人は紳士、新聞記者代言人等なりき、

◎宇治山田町の娼妓　三重縣は他縣に比すれば非常に姦淫の空氣の充滿するところなるが、殊に宇治山田町に至ては甚だしきものと云ふべし、今其娼妓の數を聞くに、古市二百二十一人、大世古、曾彌は二百二十七人合計四百四十八人なり、僅一萬二三千の人口を有する小都會にしてかゝる多數の娼妓を有するは恐らくは日本第一とも云ふべし、三重縣風俗の腐敗せるそれ斯くの如し、而して一人も廢娼の大義を唱ふるもののなきに至ては、誰れか慨嘆なきを得んや、

◎四日市女紅場免狀授與式　は去る二十六日擧行し藝娼妓百二十一名の內、受驗藝娼妓八十八名（內三十八名優等）に免狀を授與せり、

◎大湊町の女況　大湊町は近頃不景氣のため衰頽の色現はれ、婦女子の如きは一人として手藝のある者なく、遊惰の氣風日々に增長するを以て町長、山中氏は大いに之を憂ひ有志と共謀して、二見村及江村等より製出する筵織を教授してこれの輸出を試みたるに、好結果を奏したり該業の如きは六七才の小女より七八十歲の老婆と雖とも從事し易く、熟練の上は一人にして十錢以上の所得ありとの見込にて目下盛んに練習中なり

●高知縣通信

◎廢校　高知中學校女子部は本月限り廢止せられ、高等女學校新に生ずるをこゝなれり、右に付て同校にては世の變遷に依り、裁縫方法將來の廢棄に歸するを惜み其生徒の手になれる雛形數種を保存せらるゝ由

一綿入振袖一重（通常衣の四分の一）第一級生徒山田加滿、箕浦光衛、山脇榮、一單衣振袖一重（通常衣の四分の一）生徒弘田加代、一綿入比翼服一重（通常衣の四分の一）生徒太田鶴等の諸女生之を裁縫す。

◎師範女生　高知師範學校女子部には、二學年生十六名、一學年生十九名、都合三十五名なり、

◎小學校教員資格　最近の調査によれば本縣下小學校教員資格の種別は、男子九百八十九人、女子二百十一人なり、尙女子を各種に區別せは、高等校正教員十七人、尋常校正教員三十六人、高等高等校准教員五人、尋常校准教員十八人、幼稚園保姆十四人、他途出身三人、無職百十八人なりと、

◎倉知氏の歸縣　產婆教育方取調及產科婦人科實地研究の爲めさきに上京せし、倉知正忠氏は此程歸縣せり、

●岩國通信

◎岩國婦人會　仝會は數年前基督教を信奉する姉妹を以て當地に設立せられ、目下會友數十人ありて各自熱心に慈善布教に盡力せられ、且つ婦人の德性を涵養することに注意し、毎月第壹土曜日婦人講話會を開き、其都度廣島より教師を聘して有益なる說話を聞き、省心の料とせらるゝと云ふ、方今着々會務を擴張して不德不義なるもの多き、岩州の天地を清潔なる天地となし大に働かるゝ所あらんとするよし、幹事は水落貞子（水落代議士夫人）河上富子の兩氏なり、

◎玖珂郡基督教徒青年會大演說　仝會は去月卅一日春秋二季の大會を開く會則なるを以て、仝日岩國美以教會に於て大演說會を開き、地方青年の沈眠しつゝある志氣を大に興舞したり、其辯士は會員、松本益吉、廣島美以教會牧師、田中義弘、廣島英和女學校教授、栗屋七郞、仝校幹事、尾藤德義の諸君にして最と有益なる會なりし、

●上毛婦人大會

本年の春期上毛婦人大會は、四月二日原市町會堂に於て開かる、幸ひ滿天晴朗なりしかば集會するもの甚だ多く、其數百六十余人なりし、大會は當日午前十時半に開かれ、東夫人司會せらる、

初めに讃美歌廿五番を歌ひ、東夫人立て、馬太廿五章卅一より以下綿羊と山羊とを別たるゝの所を讀まれ、祈禱終りて、仝夫人は近江聖人中江藤樹幼年時代の孝心、其賢母の凜冽たる精神を物語られ、聖人には必ず賢母あるを示し、藤樹の孝心は吾儕クリスチャンの深く學ぶべき所にして、其母のあかぎれの爲め遠き道をいとはざりし、誠意は吾儕が主クリストの十字架の血を念ふて其至誠の孝心を勵まし、如何なる辛酸なることをも孝義の爲めには盡忠なるべく、又クリストに盡忠至孝にあるの道は斯小さき者につくす數に入りたる綿羊の如くあらざるべからずと述べらる、滿場爲めに感涙をなしぬ、

次で前橋教會の、後藤夫人立ち嘗て上野新聞が吾儕の婦人會を冷笑せる記事を引き、上毛婦人たるもの愈奮發興起、上毛共愛女學校に向て大に盡す所あり、以て

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

無言の返答をなすべきを語らる、

藤岡教會の、小泉夫人立て仝教會が如何に青年男女の失行によりて、教會の神聖を猥し、如何に傳道の進歩を障害せられたるかを述べ、集まれる青年婦人方に大に注意せられたり、二三人の祈禱ありて、杉田夫人次て立ち爾曹は世の光なりと聖語を引き、上毛現今の教況の、かくも冷落せる所以のものは實にクリスト教信徒の胸中確信の減却せるに因するを語られ、大に確信を得て光の實を擧ぐべしと述べらる、仝夫人の勸ありて二三姉妹の熱心なる祈禱あり共愛女學校教師山川さく子姉の斯上毛婦人會に臨みて上毛婦人の働き其精神に深く感激する旨を述べられ爾來大に盡さんことを約さる仝姉の談話終りて。辻夫人愛は僞らずとの聖語により、彼の滔々たる虚色的禮讓挨拶は大に謹むべきなるを談じ、次て二三人の祈禱あり、最後に、湯淺もよ姉が經書中の敬虔なる、アンナの一段を讀まれ、故ウエスト姉の獨身の生涯を送りて、神の爲めに盡され、終には、上毛婦人會にまて臨席せられたる恩惠、其義烈の精神は永く遂念すべきものなりと述べらる、終りに讚美歌百十一番を歌ひ、午後は自由親睦をなし、四時すぎに至り東正義氏の祝禱によりて上毛婦人大會を閉す、

因に謂ふ此度上毛婦人レプタ會集會高は十九圓七十錢に登り　之を共愛女學校に寄附すべきことに決し、次回よりの婦人會には愈奮發して、集金を廿圓以上となさしめ廿圓は女學校に寄附し、其上に集まる剩餘金は銀行に積み置くべきことに決す秋期婦人大會は、安中教會に於て開かるべきことに決して散會せり

秋山貞二報

●福井通信

◎美談　澆季の世斯る美談あり其官に聞ゆ左の褒賞あり

丹生郡吉野村片屋　吉田マツ　明治七年生

幼にして父母を失ひ克く祖母に事ふ殊に明治十六年四月より翌年三月に至る祖母疾病中晝夜心を竭し之を看護し爾來奉養怠りなく茲に十年間志行一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金一圓下賜候事

福井縣知事　荒川邦藏

右マツは明治九年八月中母に後れ、仝年十一月中父を失ひ三才の時より祖母サキに養はれたるが、去る十六年四月より祖母サキ病に罹り漸々重症に赴きたるも、元來貧家なれば今日の暮しも立て兼れ醫藥などは購ふに由なかりしに、マツは一枚ありし着換衣を賣り盡し、終には家をも賣り拂ひて療養の資に充て看護をなせ怠らざる効ありて、十七年三月に至りサキは漸く平癒したりしも、老年の事なるゆへ徒食するのみなりしに、マツは其年の五月より其隣家なる吉田彌三右衛門の下婢となり、晝間は主家に働き夜は家に皈りて祖母を慰め、鷄鳴に起き出てゝ祖母に供すべき食物を調へ、彌右衛門方に通勤し未だ一日も他家に泊りし事なく、人夫を迎ん事を勸め媒介するものあるも、祖母を粗畧にせん事を恐れて今に婚姻せずと、主人彌三右衛門もマツの志行に感じ、十七年中一棟の小屋を與へて其住居となさしめたるものなりと、

女報

淡海子編

●皇太后陛下の行啓　皇太后陛下には御轉地御療養の爲め、十二日午前八時五十分御出門神奈川縣下鎌倉へ行啓凡そ三週間御逗留あらせらるべき旨去日仰出されたり、

●月並御歌會　宮中にては去五日月並御歌會の御催しありて　皇后陛下にも臨御あらせられぬ、御題は豫定の通（燕來）なたりし、

●女子高等師範學校生徒の服制に就て　井上文部大臣は、此程女子高等師範學校生徒に、爾來洋服を着用する事を禁じたりとの説を傳ふる者あるが、今ま某當局者に就き聞く所に依れば、河野氏が文相たるの當時同校生徒着服一定の議あり、本年度より實施さるゝ筈にて、細川同校長に其取調方を囑託しありしが、同期日迄には中々取調付兼ぬるを以て、細川同校長は右取調濟迄は從來の和服を以て制服と假定ありたしとの、伺書を文部大臣に差出しありたるに、井上大臣は之を認可するの訓令を下したるものにて、決して洋服着用を禁じたる譯にはあらずと云へり（國會）

●佐々城豐壽夫人の送別會　日本婦人矯風會の名譽會頭なる、同夫人は近日北海道室蘭に移住する由にて潮田千勢、金谷錠の兩夫人發起者となり昨日午前十一時より小石川元水戸邸後樂園に於て送別會を開けり會する者百餘名德富猪一郎、元良勇次郎、津田仙、田村顯允、中川永頻諸氏の送詞演説あり佐々城本支、同夫人の答辭等ありて頗る盛會なりし同婦人は單身家族を携へ北海道に移住せられたりと云ふ

●秋元子爵の夜會　子爵秋元興朝氏（舊舘林藩主）の夜會は兼て記せる如く去八日午後九時より帝國ホテルに於て開かれたり、來會者は、有栖川大將宮殿下、同御息所を初め參らせ、伊藤首相同夫人、後藤農商務、芳川司法、土方宮内の各大臣、山尾宮中顧問官同夫人、高崎宮中顧問、鍋島侯爵同夫人、黑田侯爵、林外務花房宮内の兩次官、伊東內閣書記官長、末松法制局長官同夫人、金子貴族院書記官長同夫人、水野衆議院書記官長三宮式部次長、同夫人其他、東本願寺法主島地默雷師、其他華族及び朝野の諸紳士外賓にては、伊佛兩國公使を初め各國交際官等凡六百餘名にして、武官の外はいづれも燕尾服を着し、婦人は多くは白襟紋付なりし、主人の子爵及び同夫人は大廊下の處に在りて來賓を迎へられ、頓て十時頃に到れば例の舞踏初まる、此れと同時に談話室に、蝶柳齋の手品源水の獨樂廻はし等ありて、大に內外賓客の喝采を博せり、十一時過る頃より立食の饗應ありて、一同談笑歡を盡して一時半頃やう〳〵散會せり、當夜舞踏室の正面に秋元家の定紋打つたる徑二丈餘の金扇を掲げ、左右に二階白鳥毛の大馬印纏及び彼の有名なる無の字の槍を摸造せしものを押立て、同家重代の重寶紺糸威の鎧龍

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

頭飾形の兜、兜頭巾を左右に飾りしは近來珍らしき思付さて、別きて外賓の喝采を博したりさいふ、

●横濱フエリス女學校文學練習會の發會式　横濱山手居留地の、フエリス女學校本科生三十七名發起さなり、今回文學練習會を設け、去る三日同校に於て發會式を擧げたり、右は卅七名を五組さし田中參、東儀たか、伊津てい、竹内たか、星りやうの五子を委員さし毎月二回（第一第三金曜日）文學の練習會を開き、三ヶ月を一期さし終期には大會を催ふし委員の改選を爲すの仕組にて、練習の科目は重に邦語文章及び英詩の暗誦等なり、今發會式の摸樣を記さんに、當日東京及び山手各女學校等へ夫々招待狀を發し參會を請ひしを以て、來會者無慮百七十餘名にて軈がて、七時を報ずるや禁酒會々長、林蓊氏の祈禱あり、夫より唱歌歡迎の辭（東儀たか子）開會の趣意（伊津てい子）八雲琴の合奏、英詩の暗誦（杉戸みち子）邦語文章の朗讀（星りやう子）ピアノ、チルガン合奏、英詩の暗誦（渡邊せい子）和文の朗讀（田中參子）にて夫より唱歌を爲し、一時休憩の後名譽會員校長、ブース氏の祝辭、勸告（松田みち子）寄贈祝辭の朗讀來賓、津田仙氏の祝詞稻垣信氏の答辭あり、夫より君が代を奏し九時半頃閉會せし由なるが、校長始め生徒諸氏は孰れも熱心に本會の隆盛を望み居る由にて、漸次會員も增加すべき摸樣なりさ、

●女子成立學校紀念會及卒業式　は豫記の如く去三日淺若臨遊館にて擧行し、卒業證書授與の後校長、棚橋絢子の祝辭卒業生總代、三田さめ子の答辭其他演說、箏曲、講談等ありて來賓には南部伯、松平子、大隈英麿氏を始め朝野の貴紳四百餘名今回の卒業生人名は左の如し

高等科全科　三田さめ、高等科の中撰科　横山柳、高橋葵、本科全科　小浦範清水菊尾、船山成、佐野富、少田桃、安川富士、中根綱、佐藤節、飯田家禰、

本科の中撰科　本間美佐、手藝科全科　内田百合代（以上十四人）

同校（神田三崎町）の目的は本邦女子の淑德を發揚し女子に必要なる學術を授け良妻賢母を養成するに在りて、教程學科を高等科、本科、普通科、手藝科の四種に分ち棚橋、坪内、土子、井上、澤柳、足立の諸學士宮本根本の諸講師擔任同校主、中原文學士は山形に赴任し不在なるも、贊成諸氏の醵金にて永存の基礎固く卒業生は今回の分を併せて總數百二十人に及びたりさ、

●乳兒ある婦人の心得　若松榮町開業醫学南山一郎氏は、此程左の心得書きを印刷に付して諸人に配與せり氣篤至りさ云ふべし

哺乳定則は初生兒則ち出生後六週迄に存ては一時半毎に一回、夜中は可及的小兒をして永く安眠せしめんことを習慣せしめ、哺乳は二三回に過ぐ可からず、六週間以上三ヶ月に至る迄は、二時間に一回、三ヶ月以上は三時間に一回さす可し、夜間は可及的小兒をして安眠せしめ、若し乳を與ふることあるも、一二回に過ぐ可からず、夜間乳房を含ませ眠むる等の惡弊は禁ぜざる可からず、如此定則は出生後より注意して其兒に慣習せしむるときは決して行ひ難きに非らず、且つ其母の爲めにも亦安眠を得ること多かる可し、通常偏則の乳房を一回の料さし他側を次回の料にする等左右を交互に與ふ可し、斯の如くするときは小兒常に平等の食料を得るものにして、消化の爲めに可なるものなり、小兒自ら乳房を放つ時は旣に哺乳に飽きし、ものさし再び乳房を含ましむること勿れ、又乳房を以て小兒の玩物さなす等のことは決して爲す可からず然らざれば哺乳過量の爲め胃弱等を來すの恐れるものなり、

外報

◎救世軍の母さも云はるへきカセリン、ブース夫人は十二才に達する前既に聖書の新舊約を通讀する事八回に及べり、其の公衆に對する事業の如きも甚だ稚き時より初まれりさか、嘗て往來に出て輪を廻しなどして遊び居たりし節一人の囚人警察官に引かれて牢獄へ引行くを見たり、口善惡なきものごもは之を見て罵り合ひしが、此の小女其の囚人の如何にもしほ〳〵さして、此の世に一人の友もなき樣なるを見てあはれに思ひ、直ちに走りて其の囚人の側に至り共に幷びて町を歩み行き、其の囚人をして假令へ罪を犯し人に捨てられたるものなれども猶一人の同情を表するものある事を知らしめたり、此れカセリンが始めて家室の外に於て爲せし事業なりしが、抑々救世軍の事業も又此れを以て初めさすべきにはあらざるか。

◎津田梅子女史　アワー、デイなる雜誌に日本婦人の教育に關する諸名家の書面を載せたり、其の内に津田梅子氏が寄せたる一篇は尤も要用なるものなるがユニオン、シグナル記者は此の事に付て下の如く記せり、「津田梅子孃はウエスト女史が日本漫遊の際に、非常に盡力せる一紳士の女子にして幼少よりわが米國なるブライン、モールに於て教育を受け、よくわが國の語學に通ぜり、ラマバイ夫人が印度の教育ある婦人の代表者なるが如く津田女史は日本の教育ある女子の代表者なり孃は現今日本華族女學校英語科の長を務め、一意專心日本婦人の進歩を計り居らる彼の雜誌に寄せたる孃が文を讀むもの必ず同情を起さずんばあらず次に要用なる一篇はアリスベーコン孃なり孃は即ち牧師レオナルトベーコン氏の一女にして日本婦人に關する一書を著して有名なる人なり、其の書は「日本の小女幷に婦人」さ題しボストンのホートン、ミツフリン商會より出版せるものなりさ

◎人の一生は猶音樂の如し、之に觸るゝに諧を以てし、適當なる時を以てすれば美妙の音を發すべし。　ラスキン

（廿五）三條右大臣
かくてのみやむへき物か
千早ふる
加茂の社の
万代を見ん

（廿六）貞信公
小倉山峯のもみち葉
心あらは
今一たひの
御幸またなん

（廿七）中納言兼輔
人の親の心はやみに
あらね共
子を思ふ道に
まとひぬるかな

（廿八）源宗于朝臣
山里は冬そさひしさ
まさりける
人めも草も
かれぬと思へは

（廿九）凡河内躬恒
心あてにをらはやをらん
はつ霜の
おきまとはせる
しら菊の花

（三十）壬生忠岑
春たつといふはかりにや
み吉野の
山もかすみて
けさはみゆらん

（三十一）坂上是則
朝ぼらけ有明の月と
見るまてに
よし野の里に
ふれるしら雪

（三十二）春道列樹
山川に風のかけたる
しからみは
なかれもあへぬ
紅葉なりけり

（三十三）紀友則
久かたの光りのとけき
春の日に
しつ心なく
花のちるらん

（三十四）藤原興風
誰をかもしる人にせん
高砂の
松も昔の
友ならなくに

（三十五）紀貫之
人はいさ心もしらす
古さとは
花そ昔の
香に匂ひける

（三十六）清原深養父
夏の夜はまた宵なから
あけぬるを
くものいつこに
月宿るらん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（三十七）文屋朝康

しら露に風の吹しく
秋の野は
貫きとめぬ
玉そ散ける

（三十八）右近

年月のゆくへも知らぬ
山かつは
瀧の音にや
春をしるらん

（三十九）大伴黒主

かゝみ山いさ立よりて
見てゆかん
年へぬる身は
老やしぬると

（四十）平兼盛

暮てゆく秋のかたみに
おく物は
わか元結の
霜にそありける

（四十一）壬生忠見

さよ更て寐さめさりせは
子規
人傳にこそ
きくへかりけれ

（四十二）清原元輔

秋の野の萩の錦を
吾宿に
鹿の音なから
うつしてしかな

（四十三）權中納言敦忠

千年ふる霜の鶴をは
おきなから
久しきものは
君にそありける

（四十四）中納言朝忠

くら橋の山のかひより
はる霞
年をつみてや
立渡るらん

（四十五）謙徳公

たくひなき色にもあるかな
菊の花
いかなる霜の
おけはなるらん

（四十六）曾根好忠

みた屋もりけふはさつきに
なりにけり
いそけやさなへ
老もこそすれ

（四十七）惠慶法師

八重葎しけれる宿の
淋しきに
人こそ見えね
秋は來にけり

（四十八）源重之

吉野山峯の白雪
いろきえて
けさは霞のたち
かはるらん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(四十九)●大中臣能宣朝臣
散る花にせきとめらるゝ
山川の
ふかくも春は
なりにけるかな

(五十)●藤原義孝
野邊見れば彌生の月の
はつるまで
またうら若き
さいたつまかな

(五十一)●藤原實方朝臣
都人まつをもしらで
時鳥
月のこなたに
けふはなかなん

(五十二)●藤原道信朝臣
さよ更て風や吹らん
花の香の
匂ふこゝ地の
空にするかな

(五十三)●右大將道綱母
都人寐て待らめや
郭公
いまそ山へを
なきて出なる

(五十四)●儀同三司母
夢とのみ思ひなりにし
世の中を
なに今更に
驚かすらん

(五十五)大納言公任
瀧の音はたえて久しく
なりぬれど
名こそ流れて
猶きこえけれ

(五十六)●和泉式部
外山ふく嵐の風の
音きけば
またきに冬の
奥そしらるゝ

(五十七)紫式部
めくりあひてみしやそれ共
わかぬまに
雲かくれにし
夜半の月哉

(五十八)●大貳三位
はるかなる唐土までも
ゆくものは
秋の寐覺の
心なりけり

(五十九)●赤染衛門
思ふことなくてやみまし
與佐の海の
天の橋立
都なりせば

(六十)小式部内侍
大江山いく野の道の
遠ければ
まだふみも見ず
天の橋立

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（六十一）伊勢大輔

古への奈良の都の
八重櫻
けふ九重に
匂ひぬるかな

（六十二）●清少納言

もとめてもかゝる蓮の
露をおきて
うき世にまたは
何かかへらん

（六十三）●左京太夫道雅

諸共に山めくりする
時雨かな
ふるにかひなき
身とは知らすや

（六十四）權中納言定賴

朝ぼらけ宇治の川霧
たえ〳〵に
あらはれ渡る
瀨々の網代

（六十五）●相　撲

あはれにも暮ゆく年の
日數かな
かへらんことは
夜のまと思ふに

（六十六）大僧正行尊

諸ともにあはれと思へ
山櫻
花より外に
しる人もなし

（六十七）●周防内侍

櫻花をしむ心の
いく度か
ちる木のもとに
ゆきかへるらん

（六十八）三條院

心にもあらて浮世に
なからへは
戀しかるへき
夜半の月かな

（六十九）能因法師

あらしふく三室の山の
もみち葉は
たつ田の川の
錦なりけり

（七十）良暹法師

さびしさに宿をたち出で
なかむれば
いづこも同じ
秋の夕暮

（七十一）大納言經信

夕されば門田の稻葉
音づれて
あしのまろやに
秋風ぞふく

（七十二）●祐子内親王家紀伊

おく霜もしつ心なく
秋風に
みたれてさける
眞野の萩原

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

孤兒之友

畜勸子 編

北海孤兒院報告

一月分報告

第一 寄付品

一青年會月報第三號 東京基督教徒青年會
一禁酒雜誌第七號 横濱 林 蓊
一女學雜誌毎號 東京 孤兒之友
一{人形六、カード張込繪本七、手袋十五、手拭一反餘、カード廿一枚、翫具種々、鉛筆十三本、筆十對、石筆十三本、膚着涎掛等種々、洋罫紙二帖、半紙七束、羽織紐十五筋、柳行李一、} 札幌 スミス女學校
一北海毎號 箱館 永田 礪
一福音新報毎號 仝 吉田茂人
一喜之音毎號 東京 孤兒之友
一教誨叢書第八輯 網走 阿部政恒
一鰈數十尾 紋鼈 增田大吉
一半紙十帖 仝 村本清之進
一亞麻製線器 仝 岩本粂三郎

第二 寄付金

一金壹圓 横濱 關川重吉
一金三圓三拾錢 仝 北島五郎右衛門
一金三圓 仝 日下部金幣
一金二圓 仝 稲垣 信
一金二圓 仝 林 蓊
一金壹圓 仝 熊野雄七
一金七圓八錢二厘 盛岡 日本基督教會安息日學生
一金二圓 仝 小谷野敬三
一金五拾錢 仝 小泉サダ
一金二圓 京都 矢島韞
一金五拾錢 東京 瀧本善作
一金五拾錢 仝 宮部 功
一金壹圓五十錢 靜岡 近藤尚造
一金壹圓六十六錢 横須賀 寺島 章
一金壹圓 埼玉縣 高野丈三
一金五圓 紋鼈 齋藤眞知
一金五圓 仝 田村顯允
一金壹圓 仝 齋藤 清
一金三圓 仝 增田大吉
一金五圓 箱館 アンデレース
一金壹圓六十六錢 東京 石原保太郎
一金壹圓 札幌 スミス女學校
一金壹圓 横濱 長 政道
一金拾五錢 紋鼈 中澤 正
一金五拾錢 仝 大堀貞雄
一金參圓 横須賀 關川猪三郎
一金參圓 岩手縣盛岡婦人慈善會
一金二圓 仝 三浦 徹
一金拾圓 名古屋 服部俊一
一金四拾錢 横濱 西松源一郎
一金壹圓 宮城縣 大泉 奏

第三 賣上代金及預兒月俸

一金壹圓九十八錢 靴下
一金拾圓 預兒月俸

總計八拾三圓七拾三錢二厘

○支出

一金二拾圓廿七錢四厘 白米六俵
一金五圓七拾三錢 餅米六斗
一金拾四圓六錢九厘 麥十一俵
一金六圓四十錢 馬鈴薯三十二俵
一金五圓三十一錢 切手ハガキ
一金七拾六錢三厘 下駄草鞋類
一金拾九錢 勝手道具類
一金二圓四十錢 孤兒寫眞
一金壹圓五厘 農具類
一金拾四錢五厘 衣類
一金拾七錢 藥料
一金壹圓廿二錢 雜費

總計五十八圓九錢六厘
差引殘金二十五圓六拾錢六厘 準備金ヘ入ル

二月分報告

收入

第一寄付品

一鹽魚廿五尾 虻田 黑田 濤
一昆布一マルキ 仝 吉田庄助
一酒粕 仝 齋藤篤三郎
一漬物壹樽 仝 關根善十郎
一箱館新聞毎號 箱館 永田 礪
一福音新報毎號 仝 吉田茂人
一國會毎號 東京 武市安哉
一栗三升 紋鼈 齋藤鐵三郎
一蜊二升 有珠 梅内多七
一女學雜誌毎號 東京 孤兒之友
一喜之音 仝 仝

第二寄付金

一金七圓六拾四錢 虻田 後藤顯美
一金壹圓二拾錢 東京 青木金太郎
一金壹圓 仝 菅 直太郎
一金壹圓 仝 有賀榮二郎
一金五拾圓 仝 中川嘉兵衛
一金五圓 仝 岡見清致
一金壹圓 仝 小川義綏
一金參拾錢 信州 市來敬太郎
一金拾圓 箱館 相馬理三郎

總計七拾七圓拾四錢

○支出

一金拾參圓五拾三錢二厘 白米四俵
一金五圓九拾一錢 麥五俵
一金八圓 馬鈴薯四十俵
一金壹圓八拾二錢 魚肉及豚肉
一金五拾六錢五厘 八百屋物
一金參圓四拾三錢九厘 衣服類
一金九拾八錢 家具什器
一金二圓拾七錢五厘 ケリ五足并ニ下駄
一金八圓九拾二錢 種痘入費及藥料
一金拾錢 郵便切手
一金三圓七拾二錢二厘 雜費

總計金四拾九圓拾九錢三厘
差引殘金金二拾七圓九拾四錢七厘 準備金ヘ入ル

明治廿六年三月

北海道虻田村洞爺湖畔

北海孤兒院

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

隔週發行 評論

第壹號目錄

發行之辭

時事

北畠親房の歎○賢者に讓れ○改革の途一耳○黒田清隆○西郷從道○山縣有朋○文部省改革○平民的大日本教育界○植民論の氣勢○千島○五岳上人○小橋勝之介○寄席改良○第二の公道○日本人の景色なり○常識ある哲學士○經しわとにしも變らざりけり○醉處居士

講壇

社會成立の基礎（植村正久）

文學史骨

第一回。快樂と實用（明治文學管見の一）透谷庵

〔文界時事〕局面一變。美學。批評家遂に無用か。官人と文學。博文館主人の雄志。幕府の遺才

時論

殖民と禁酒（安藤太郎）○千島の拓殖（山田享次）○日本の農業（横井時敬）の三文に對する隙言

〔片々擲々〕新發見の聖彼得傳福音書○神の家と宣教師の居宅○日本に在る米國監督教會傳道會社○財產○井上毅○現今の德育○我邦古代專制獨裁に非ず○獻金の催促は誰の發意ぞ

〔清夜閑話〕

書架

〔新加〕德川十五代史○明治歷史○同じく其參考書目○雙解英和大辭典○紀念論文コロムブス功績○パプテスト教會史畧○パプラスマの畧解○小學孝經忠經講義

〔文しらべ〕日本切支丹迫害の事調查書目

〔逸話〕然らば妾と結婚せよ○一日詩四行○名家失望す

徒然草

をみな（新躰詩）紫苑山人●田舍だより（書簡躰）若松しづ子●ブラクター孃の歌一節

史傳

韓客私言（依田雄甫）●戰國以后の佛教（西森拙藏）

雜錄

大學生移住の事業●職工軍團の現在（伊藤爲吉、記）●酒が及ぼす道德上の諸大害、統計一覽表の小解。並に其統計表（農學士某調查）●

海外風信

印度輕んず可らず●濠地利、金本位制度を起す●公共の利益と公共の事業●多妻州ユタ聯邦編入問題

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下
御覽の書

（リツトルロードフォントルロイ）

再版 小公子

子供のよみ本 ◆ 若松しづ子譯

森田思軒居士の批評

余紛々たる世間の譯文に於て平生甚だ許可少なし獨り若松賤子の「小公子」に驚嘆す今「罪と罰」を得て又之を二にせむとす二書が皆な其文を俗話躰に取りしは極て智なり苟も俗話を以て文となせば其詞を採り其の方式を求むるの廣くして且つ便なる車夫厨婢の偶語も直ちに我が文の資とならざる無し若し專ら雅言を用ひば「小公子」のフォントルロイが始て老侯爵に謁する處本書の醉漢が醉言する處の如き余は恐る縱ひ賤子不知庵が如意の筆を以てするも寫して今の文の半ばにも至るを得ること能はざるを余は是に於て益々世間の譯者の窮處が其詞に貧なるの一事に根する者多きを知る。

實價金貳拾八錢
郵稅金八錢

發行所 東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

取次所 東京◉東海堂、巖々堂、東京堂、武藏屋、警醒社、京都◉便利堂、東枝律、大坂◉岡島、梅原、神戶◉福音社、熊本◉草野、函館◉福音舍

林士 星野愼之輔君著

昆蟲 植物 金石 採集法

正價金八錢
郵稅金貳

昆蟲界	植物界	金石界
昆蟲分類	葉とは何	金石分類名稱
昆蟲變態	花とは何	金石の現出
採集地	枝とは何	識別鑑定法
採集注意	植物南	岩石の現出
採集器	採集すべき部分	土性の現出
貯蟲法	採集氣節	土性分類名稱
剌針法	採集器具	土性分析法
昆蟲運搬法	乾腊法	採集器具
幼虫類飼育法	標本製造	採集法方

麗かなる新綠の野外に杖を曳きし時、諸子は可憐なる峽蝶を見て何かに感ぜしか、涼しき樹陰の溪流に沿ひ遠足せし時、諸兄は美麗なる昆蟲を觀て何かに感ぜしか。之を採りて直に納め、坐右に博物館を開きて友を延き、一は天の美を樂み、一は研究の好材料とせんとするならん、之を以て散策一層の樂み深し、多愛なる諸友よ予が採集を講ずるは、蓋し割愛耳云々之れ著者の言なり

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

農科大學出身星野愼之助君編

應用植物編
(附)詩經植物類考

クロース製本二百三十頁
定價金四拾錢

右は君が大學々窓にありし時自から便に供せんとて編み置かれしもの、此頃某校教授上の必要より印刷せられんとするを乞ふて出版せり、之を一見するに便利なる有用植物索引書とも言ふべく、明亮なる實用植物の戸籍書とも言ふべく、簡明なる植物分類撿定書とも言ふべく、殊に凶年に食し得べきもの、藥用のもの、有毒のもの、牧草用のもの、纖維用のもの其他種々の用に供すべきものを一々明かにして其性質形狀などを掲げ、澱粉纖維タンニン等の製法をも示す、而して索行表ありて容易に之を探ねるを得るなぞ親切至れり、其分類撿定表、合科植物特徵表、材木有害灌木利用表の如き最も便を屬す就中詩經植物類を務めて翻譯し、支那の歌草詩花を明かにせし如きは文學の範圍に關する所少しとせず。要するに植物學を學ばざる者も、又農家にも一本を備へて便利言ふべからざるものなり。

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

發賣所 東京市日本橋區通り三丁目 **丸善商社**

賣捌所 東京堂、東海堂、巖々堂、武藏屋、中西屋、警醒社、瑞穗屋、小林

文學界

第二號要目

三月卅一日發兌

心影及び其贊
鬱孤洞漫言 禿木
觀世音夢 天爲居士
かたつむり 無聲
彙報 新紙文字、テイン氏逝く、新刊雜誌紹介、新刊書紹介
群書一斑 芭蕉を觀る書類、兼好を觀る書類其他數件
イリオツト 棲月
(小說)雪の日 一葉
琵琶法師 古藤庵
(附錄)女歌仙家集—伊勢 大和田建樹

改正

定價表

東京市内	地方郵稅共
一冊 六錢	八錢
六冊 卅三錢	四十五錢
十二冊 六十錢	八十四錢

本紙は非常に愛顧を給ひて**第壹號**の**再版**及び**第二號**共に**賣切**に相成切角の御注文に反き申譯御座なく、第三號よりは、猶一層部數を增刊仕候間何卒引續き御愛讀奉願上候

文學界發送部

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

東京經濟雜誌

四月八日發兌
第六六九號

本號之社說

◎横濱築港の防波堤に龜裂を生す
◎鐵道賃金低減の議
◎居留地制度と內地雜居（第二）
◎近世財世事情

本號之論說

◎內地雜居論……大嶋貞益
◎日韓貿易之現狀一斑……長島咢次郎

本號之寄書

◎天明度の大飢饉……川上廣樹

墨國探征日誌

◎墨國探征日誌（續）……恒屋盛服

雜報　數件

銀行及商業之景況數件

定價郵稅共七錢五厘

東京々橋區彌左衛門町七番地

發行所　經濟雜誌社

裏錦

第六號（四月十五日發行）要目

●婦道の巨觀
●女子の責任……織織
●緑の玉、紫の水晶……錦子
●露國の大妃オリガの略傳……しら菊
●留守伊豫子の傳……林丘子
●楊貴妃櫻と思ふ……土筆
●僞皇子（大寺院門前の場、御城內の場、修業寺の場）……殘月庵譯
●つばめ……林丘子譯

定價一冊六錢六冊前金三十三錢十二冊前金六十錢市外郵稅一冊に付一錢

發行所　東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地　尚絅社

大賣捌所　東京神田區表神保町三番地　東京堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌(第三百四十二號)(明治廿五年三月十五日遞信省認可)明治廿六年四月十五日發兌

毎月一回發行

宗教

目次

◉社説
●神に關する信仰 クレー、マツコーレイ
◉論説
●自由神學は積極的なるを論ず ウイリアム、アイ、ローレンス
●社會の性質 矢部新作
●ベルリコ道義要論 在大學 宮本平九郎譯
●教育と宗教(井上博士の説を評す) 土谷忠治
●精神は精神を整理す 岩井正次郎
◉傳記
●處士大宰春臺 理財學士 林和太郎
◉雜録
●萬國宗教大會に就て佛教有志家の告白●説教家の要●宗教界の紛擾政治家の仲裁●日清の比較
◉近刊雜誌
◉彙報

六冊前金卅錢●十二冊前金五十錢●郵稅不要
第十七號三月五日發行

〔注意〕見本は一冊限り無代呈上す
但號數は本會の都合による

宗教 第三卷
自第十三號至第十八號合本
定價金二十五錢郵稅六錢
郵券代用差支ナシ

右合本出來致候に付至急御注文相成度候第一卷第二卷合本是又御注文被成下度候也

東京京橋區加賀町八番地
日本ゆにてりあん弘道會
宗教發行所

本校學年試驗結了に付。高等科、普通科、幼年科の各級共入學を許す、四月廿日迄に申込を乞ふ、
但し規則書を要する向は郵券三錢寄送あれ、

東京市麴町區下六番町六番地
明治女學校

雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事
雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

六冊	前金三十五錢	府外三十八錢
十三冊(半年)	同七十三錢	同七十八錢
廿六冊(一年)	同一圓三十錢	同一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵稅 金五厘

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增と定む。

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

東京牛込區市谷秀英舍工場印刷(電話十九番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY